

81-743



通稱平八郎儒者
中齋養子與力
中齋友人詩人

宇津木矩之丞 中齋門人彦根藩士

潮田濟之助 同 與力

庄司儀左衛門 同 同心

渡邊良左衛門 同

平山助次郎 同

近藤梶五郎 同

大井正一郎 浪人

梅田源右衛門 同

宮 脇 志 摩 神 官

白井孝右衛門 百姓

橋本忠兵衛 同

美好五郎兵衛 同 後染物屋

門邊大和守 町奉行

大米屋金右衛門 豪商

同 金之助 金右衛門伴

倉屋重兵衛 豪商

錢屋多兵衛 同

太田屋德右衛門 同

榮屋利右衛門 同

内山彦次郎 同心

玄六
友藏
銀兵衛
鵜 鵠
阿 蘭 陀

大和守下來
矩之丞下來
大米屋番頭
幫 間
幫 間

準 次 郎 七
盜 賊
中 齋 妻
五 郎 兵 衛 妻
同 娘

其外書生、徒黨、同心四ヶ者五人組、仲間、番頭、丁稚、職人、船頭、藝子、舞子、仲居等

場所 攝津國大阪、六甲山
時 天保七年、八年



大鹽平八郎

第一二段

其 權現宮

正面遠く徳川茶屋の廟あり左右に諸侯より献じたる石燈籠並ぶ前に門あり戸側に茶店あり床机二つ三つ鈴太鼓の音

舞間鶺鴒踊つて出づ

鶺鴒も蔭ぢや〜〜〜

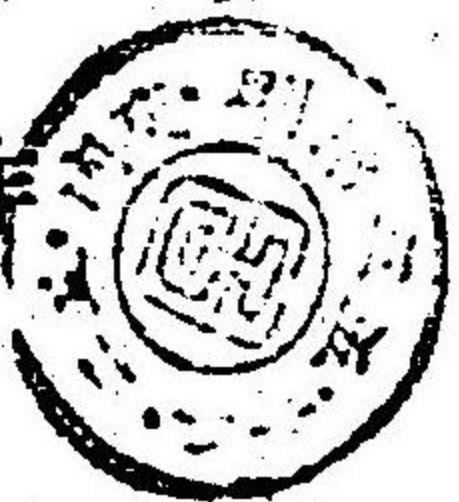
大米屋金之助豪商の若旦那の風羽織をろりと着て懐手藝子舞子仲居つれ

金之これ〜鶺鴒好い加減に止めんかい

藝子人が顔を見ますぞえ

舞子あれ向て笑ふて居やんす

高安月郊作



仲居 まあお休みなさんせいなあ。

(皆床机にかけ茶店女茶を汲て出す)

女 ようお参りてござります。

金之 けふはえらう淋しいなあ。

女 此頃はお蔭参りて皆お伊勢様へおいて故それてこちらは此通り淋しいのでござります。

鷗鷗 それどうてござります。何しろ六つや七つの子が親にねだつて叱られて入れられた押入をいつの間にかやら抜参り、太神宮のお後を首にかけて戻つたとは、第一お蔭ぢやござりませぬか。それから續いてお禮参り、阿波から江州、紀州、五畿内、此大阪の人氣といふたら、落城此方無い騒ぎ。

金之 仰山な事云ひをるわい。

仲居 いえ、本間でござんす。内の旦那も此間、緋縮緬のばつちの揃へ百人連ておいでなさんしたし。

鷗子 私等仲間も抜参り、手柄顔に致しやす。

舞子 白馬に乗つて八つの子が参つたといふぢやござんせぬか。

鷗鷗 犬までもお札を下げてお蔭かなてござります。

金之 そりや面白、誰の句ぢや。

鷗鷗 それよりは、施行親乗手の方がくたびれる。

金之 ハ、ハ、いや、施行と云や内の親父も、二百兩張込だ。

鷗鷗 左様ぢや相にござります。イヤまた施行のはやる事、堂島は施行宿、十二濱は米三十石市の側は草鞋二万、薬屋は黒九子、本屋は道中記、竹屋は竹杖紙屋は半紙、烟草手拭縮緬、雑魚雲助まで、只て乗せませぬ、これでは鷗子さん達も、施行三味線、施行舞、我等も一つ施行して、歌右衛門か幸四郎、道々やつて往させませう。旦那どうてござります。此勢で抜参り、アツと云はそぢやござりませぬか。

金之 えらい事を云ひ出したな。

鷗鷗 それでもお蔭ぢやござりませぬか。斯うお供してまるつた所は、先づ若旦那のお蔭でござりませう。其又若旦那の御全盛は、大旦那の皆お蔭、大旦那は又御代、御先祖は東照宮権現様のお蔭で、太平其又権現様も源を正して見ればお伊勢様、それお蔭ぢやござりませぬか。

鷗子 何ぢや鷗鷗さん、えらい理屈ぢやなあ。

金之いや云ふて見ればそんなものぢやそんならこれから行くとしやうか。
報問阿蘭陀擬錦襦の筒袖を着て走つて出づ。

阿蘭 若旦那

金之なんぢや阿蘭陀其舛は。

阿蘭 此筒袖でござりまするか阿蘭陀も名ばかりでは面白うござりませぬ故けふは
一つ目先を變へ羽織から阿蘭陀風。

阿蘭 其いてたちてお蔭参りか。

阿蘭 いしや伊勢より西の方長崎行はどうでござります。

金之なに長崎これはまた思ひもよらぬ。

阿蘭 日本三景も皆御存じ湯治場も御退屈それより一つ新しい日本でも唐阿蘭陀
變つた所を御見物とは何と妙ではござりませぬか。

金之これはまた妙過て一寸思案がつかぬわい。

阿蘭 いや長崎行も變つて居るが當時は何てもお蔭参り矢つ張ち伊勢様が好うご
ざりませう。

金之さうぢやこれも流行故後れるのも残念ぢや。

阿蘭 子、そんならこれから伊勢様へ？

金之オ、直に行くとしやう。

阿蘭 それなればまた趣向どうぢや鷓鴣何が好からう。

阿蘭 されば只参つては面白無し、揃ひの衣裳も趣向してどうぢや忠臣蔵の討入装束。

東

阿蘭 忠臣蔵はもう古いそれよりは佐倉宗五郎百姓一揆の義笠出たち。

阿蘭 子もつさりした事云はしやんすな。

阿蘭 そんなら揃ひて此筒袖

仲居 あほらしい私等まで筒袖が着られるかいな。

阿蘭 やつぱり戻つて元の猫ぢやそんなら揃ひの緋縮緬上へわざと破れ合羽。

阿蘭 杓を犀の角でして通し駕もお慰み途中一寸施行して。

阿蘭 金銀の大花籠これを先へ押立て、戻りには宇治橋か杉玉の横面へ投げ

てやるとはどうでござります。

金之面白く、極めたく、それでは直に其用意それ二十兩二人して走つて行け。

私はこれから網島で一杯飲つて待つて居る。

阿蘭 かしこまりました。そんなら若旦那
阿蘭 皆さんお頼み申します。どれ一走り。
阿蘭 やあそこせい。

阿蘭 よいとやあ。

(二人走つて入る。)

金之 ハ、ハ、ハ、いやこつちもそれではやあそこせいぢや(立上る)

舞子 そしてあの権現様へは?

金之 権現様はまた今度お伊勢様と極めて見ると何とやら気がせくわい。
仲居 そんならお参り

舞子 なされませぬか。

金之 それより早く行くとしやう皆来い(音上手へ入る)

女 難有うござります。(片付けて入る)

五郎(金之助の跡を見送り)の様々ぢやなあ有る所にはあの通り湯水の様に使ふて

も矢つ張跡から湧て来る無いは此通り毎日々々働いても年貢諸役御用金
かて、加へて大風大水不作にかさむ借錢に田地諸道具皆取られ三郷借屋も

居たゝまらず百軒長屋の苦しさより捨て置かれぬ先祖のお位牌代々の
形見まで人手に渡す口惜しさ小前ながらも養子の身私になつて潰してはど
うしても云譯無いといふて戻す見込はなし思々しいはあの息子位牌を出し
てやる代り厭がる娘を妾にとは餘り見下げた申分癪にさわつてならぬ故そ
んなら入らぬと断つて私から切つた頼みの綱落ちた跡は女房子が困るは知
れた事ながら共々乞食しやうよりいつそ無くばと空頼みかう運が傾いては
何をしても手違ばかり面白無い娑婆に居て濟まぬ濟まぬと苦しるより先
は知れぬがこんな身は地獄でもかまひはせぬ鬼には此世で逢ふて居る餘所
目に極樂見るよりも皆目見えぬが好いてあらう。

大米屋番頭銀兵衛下手より出づ。

銀兵衛 オ、五郎兵衛さん好い所で逢ひました。まあ茲へかけて下され(床机へかけ)時
に此間の返事はなあ?

五郎 娘の事ならさつぱりと断り申しました。

銀兵衛 そつちはさつぱり断つてもこつちがさつぱり思切られぬも一度思案し直し
て承知したらどうぢやいな。

五郎 エイ何と仰つても、お断り申します。

銀兵 そんなら何か先祖の位牌も大事の品も取り返さいてもかまはぬのか。

五郎 かまはぬ事はござりませぬが、どうも仕様がござりませぬ。

銀兵 何の仕様がなない事があらう娘の事さへ承知をしたら直埒のあく事ぢやそれとも違てことわるなら若旦那のあの氣性位牌も何も一握み焼ておしまひな

五郎 そりやまた無法ぢやござりませぬか。大切な先祖の位牌。

銀兵 そつちには大切ても、こつちには屑同然我樂多とあの娘こりやえらい替へ徳ぢや。お前達も一生涯左團扇でくらされる。こんな甘い話はない金の港の大坂ても、一か二の大米屋大港に寄りもせず浪にゆられて捨小舟流れて行くとは餘りたはけ。

五郎 たはけても阿保でも娘の綱でかゝり舟そんなさもしい事はしませぬ。

銀兵 其なりになつて瘦我慢あされてものが云はれぬわい。しかしこの若旦那一方ならぬはまり様南も北も潜ぎ分けて上旬の果の枯蘆が靡かぬとて引かれはせぬ。こりやも一度出直す故是非共返事をして下され。

五郎 エイしつこい断はりました。

銀兵 まあさ思案をしなされといふに。(入る)

五郎 貧乏すれば侮つて何を云ふても聞入れぬ。忌々しい男ぢやなわ。しかし誰もあの通り金があればあの阿呆も若旦那とそやし立て何事も思ふまゝ金が無いはつかりて可愛い娘をもてあそび、エイ誰がするものか。お金といふもの誰が造つた敵ぢや鬼ぢや魔王ぢやなわ。

娘おみね急いで出づ。

みね オ、父親こゝににおいてなされましたか。

五郎 ヤ娘——お前は どうして。

みね 私やあなたの御様子が、どうも心にかゝる故追ひかけてまゐりました。そして工面は出来ましたか。

五郎 何の出来るはづがあらう。

みね そんなら何となされます。

五郎 何と云ふて仕様が無い私。はこれから——旅へ行く。

みね 旅へとはそりやどこへ。

五郎 さうぢやあの蔭参り。

みれ 氣樂な事を云はしやんすな。そこどころではござりませぬ。

五郎 いや所詮これといふ當はなし。それよりは伊勢様も参りてもして見たら、また好い事があるも知れぬ。あ此世は誰の蔭やら。目當も知れぬ。お禮参り一人旅ぢや心がせく。

みれ まあ待つて下さりませ。何やら胸が騒いで来た。こりや止めて下さりませ。お金の工面も私の身をどうかしたら出来ませう。

五郎 エイ假令餓死すればとて娘を賣つて食ふ様な。五郎兵衛は親ぢやないわい。

みれ それぢやと云ふて此せつば。

五郎 それもどうかなるであらう。もう私の事は心配すな。

みれ それではどうてもお参りに？

五郎 オハ禮やらお詫やら——そなたにも濟まなんだ堪忍してくれ。

みれ エイ氣になる事ばかり短氣な事なさるのではござりませぬか。

五郎 何の短氣——氣長う遠い旅をする。これは僅ばかりぢやが當分の暮しにしゃ。
(財布を渡す)

みれ そしてあなたの路用は？

五郎 一文無しで行ける旅ぢや、それよりは跡の事必ずく身を落すな。

みれ それは洗濯賃仕事何なりとして行きますが早う歸つて下さりませ。

五郎 歸りたいは山々ぢやが劍の山か血の池か——

みれ エイ。

五郎 死だと思ふて回向して——

みれ えい元の悪い事云はしやんす。こりや是非止めて下さりませ。

五郎 いやくどうも止められぬ。そなたは随分無事に居や親は無くとも子は育つ。こんな親は無い方が好い運がまはつて來う。蔭ながら祈るぞよ。(行きかける)

みれ これまあ待つて下さりませ。

五郎 いや止めるな。さらばじやわい。(振切つて入る)

みれ あれ父様待つて下さりませいなあ。(追ひかけて入る)

其二 淀川

向に大阪城上手に天満橋下手に網島見ゆ月明中流に小舟一艘中に頼山陽

大壘中齋、いづれも羽織着流し、大壘格之助袴ばかり、船尾に船頭控め、

中齋 かしまじき世を暫は、茲に離れて大川や、水の心は月のかけ、月の心は我心太虚、くもらす村雲を拂へば、同じ生死の外に動ける、良知こそ、此川風ては、ござらぬか。

山陽 げに清風と明月の主人が出す、盃に酔へばをかしや、夜の様醜き所、押隠し、光るは星か、ともしびの橋を過ぐるは、人や行く櫻の宮は、朧々と東の山も、稍薄し、時は遠へど、赤壁の蘇子が遊もかくやらん。

中齋 彼に劣らぬまらうと、一氣に乗りて、果知らず、いでや、夜濤を聞くべきか。
山陽 其黄樓の聲よりも、誰が吹きすさぶ、籟の音に、我孟徳のやまと、歌今に残れる、大阪城。

格之 一首伺ひたうござる。
山陽 いや、時句よりも先立つは、猿面冠者の身の終。
中齋 客には何を嘆かる。

山陽 さればあはれて、ござらぬか、赤手に龍を生捕つて、虎に惜まらず、肉分ち、繋ぐ天下も、一時の榮華は、波と碎け散り、空しく、殘る石垣に、文字並べても、何の詮、こりや

誰が答てござらうな。

中齋 しかし、彼も快人ぢや、四海を握つて、私せず、得るに従ひ、散らすとは、

山陽 散らすのみにて、保たずば、明を得るとも、足りはせじ。

中齋 さればこそ、家康が跡を拾ふて、徳川の天下も、今に三百年、

山陽 盛りも、茲に極まりましたな。

中齋 いや、人より見れば、長くとも、天より見れば、春一夜、兎にも、角にも、情慾の波瀾は、夢かまぼろしか、是にもあらず、非にもあらず。

山陽 足下は、よるづ内に見て、心を洗ふ、洞の主、我は、先づ外に見て、想ひめぐらす、峰の客。

中齋 異なる氣質も、知り知られ、名利を辭して、我も、今淀の流に、書を讀めば、

山陽 鴨の流に、筆洗ふ、技は、遠へど、文と儒といと、相合ふ、意氣と意氣。

中齋 彼時、獨り胸を指し、復出るなと、戒めしは、天下に、足下一人て、あつた。

山陽 いや、君も、圖らず、用ひられ、奸を挫き、邪を除き、餘りに、剛に過ぎたれば、折るゝを、待たず、退きて、また、動かぬに、若く、事無し。

中齋 誠に、君の云はるゝ如く、心太虚に、歸して、より、學て、時に、教ゆるばかり、氣を養へ

ば胸安し。

山陽 願はくばいつまでも互にかくてありたけれ。
中齋 身は衰へて朽つるとも心ばかりは残さんと洗心洞割記二巻此程より着手致した。

山陽 それは早く見たきもの某も日本外史漸く過日脱稿致した。

中齋 待ち兼ねし大著述是非々々内見致したし。

山陽 近日お送り申すてござらう。ア思ひ出せばこそ秋先師の杖を失ひし憾晴れしも君が裔。

中齋 人に許さぬ畢生の著述示すも我故か。

山陽 今又茲に酌みかへす智の盃は限無く

中齋 夜は深るとも時知らず。

山陽 處は比無き大澱に。

中齋 繁がぬ舟の面白さ。

山陽 こりや十分に

二人

過しませうか。

格之 あれく月に村雲が――

中齋 いや曇らぬ心は澄み渡る此清興に看せよ。

山陽 看は何より此古城。

中齋 いや城よりも尙長き月と蘆と四羽の雁

山陽 あの趙子璧の一軸を？

中齋 献じませうか。

山陽 いやこりや大酔を致したわい。

歌聞ゆ。

夜櫻やうかれがらすがまいくと

花の木蔭に誰やら居るわいな。

格之 こりやいとはしき絃歌の聲

中齋 少しく舟に棹さして遡らうではござらぬか。

山陽 それも一興然らば御主人。

中齋 格之助に船頭に申付けい。

格之 ハッこれ船頭少し上手へやつてくれい。

船頭かしこまりました。

(舟に棹して入る)

此方より尾形舟出づ中に奉行門邊大和守大米屋金右衛門いづれも着流し酒宴の味藝子仲居酌する船頭棹さす。

大和 好い心持になつてまるつた。

金右 どうぞ十分お過し下さりませ。それお酌

仲居 ハ——イ。

大和 いやさう飲ては此川へはまるかも知れぬわい。

藝一 私共が居ります。

藝二 お手をお取り申します。

大和 其方共が何の役、それよりは御主人ぢや何と酔ふてもかまはぬかな。

金右 かまはぬ段てはござりませぬ。百杯なりと千杯なりと、お酔ひなさるまでお進め申します。

大和 それはかたじけない。然らば其氣で飲むと致さう。先の跡を歌へく。

藝子歌ふ。

とほけさんすな芽吹柳が

風にもまれて居るわいな

大和 ア月が出たか、舟が大分動く様ぢや。

金右 それでは一寸附けませう。それ船頭。

船頭 ヘイ。

(舟を下手の岸に附ける)

金右 (藝子等に) 次手にそち等も上つて来い。少しお話がある程に

藝一 そんなら旦那さん、

藝二 一寸行つて

四人

まゐります。(二人を残して入る)

金右 さてお話と申します。此間の新田の事どうぞ五千兩でお拂下は願へませぬか。

大和 五千兩——五千兩とは安いものぢやが——そこはこれ此方の事まゝよろしい承知致した。

金右 それは難有う存じます。それから一つ伺ひます。近日の此不作、今歳も不順でござります。故秋が思ひやられます。若し飢饉にでもなりましたら、どうなされます。思召て。

大和 それは何とも云はれぬが用意米は十分なり出せば出せぬ事もなし、しかし江戸の模様もあり、市中の工合でそこはまた思案をしまひものでもござらぬ。金右 そんなら一つ調べまして改めて申して出ます何分よろしう此後とて。大和 呑込だく、兎角酒には着ぢやて。金右 そこにぬかりは致しませぬ、これは明石の櫻鯛花は散つても残る實を御賞翫下さりませ。(金包を出す) 大和(懐に入れ)實とは結構花に無用、これ一杯重ねやうか。

藝子 仲居船頭出て来る。

昔 もうおよろしうござりますか。

金右 丁度好い、酌ぢや。

仲居 ハーイ。(昔舟に乗る)

金右 また船を出してくれい。

船頭 かしこまりました。

(中流に出す、上手より大壺の舟、磨れ違ふ、月明身投の音)

双方 あの音は？(昔顔を出す、互に見合す)

中齋 やこれは！
格之 確にお奉行
山陽 エ？

(門邊障子を閉つ)

五郎兵衛 流れ来る、大壺の舟に寄る。

中齋 (引上げ)イヤ我等もこれは罪人ぢやわい。

第二段

其一 門邊邸 玄關

正面左右襖立切り前一段低く式臺あり其下庭下手に門あり外は屏仲間二人庭を掃除す。

一 何と厭な世の中になつたぢやないか。

二 さればぢやわい地震大風長雨に時疫とはよう揃ふた。

一 いかによ作といひながら一兩に三斗とは生れてから今が始

二 これでは飢饉も其筈ぢや。

一 此間東海道を通つて来た人の話に道々死人が五六人死にかゝつて居るのは何人と數へる事も出来なると。

二 おれも見た谷町で現在溝へこけこんだ。

一 ひもじいと云ふ聲をけさも聞たが情無い。

二 祭所ぢやあるまいにけふ練物を持つて來るとは。

一 それは殿様の思召し今歳止めたら來年から重ねてならぬとあつしやる故ぢ

二 や何しろ我等に損はなし見る丈徳ぢやあるまいか。

一 それもさうぢや泣言よりまんざら悪うもないものぢや。

(囃子の音)

一 われ／＼向へやつて來た。

二 それではお知らせしやうかい。(二人入る)

大壘格之助頼て大米屋金之助出づ顔を見合はず格之助わざと後になる。

金之助門に入る。

金之助願ひ申します。

玄六出づ。

玄六オ大米屋さん。

金之一寸お目通りを願ひます。

玄六かしこまりました。(入らうとする)

格之(門に入り)アイヤ暫く拙者もお目にかゝりたうござる。

玄六ヤこれは——イヤ御他行てござります。

格之今此仁にお取次なさる所ぢやござらぬか。

主六 ヤそれは、
格之私ならぬ天下の大事是非々々目にかゝらにやならぬ。
主六 ハーイ。(入る)

二人 あの音は？

練物出づ、羽間、阿蘭陀先に立ち、藝子四人花やかなる衣裳をつけ、仲居
團扇を持つて附添ひ、其跡より屋臺を引き、中に嘶子方揃ひの衣裳花笠を
かぶり、太鼓三味線笛などはやしながら来る。

阿蘭(門に入り)「へい」例年の通り練物でござります。
主六 出づ。

主六 唯今御出坐なさるゝぞ。
一同 へい。

阿蘭(金之助を見て)「オ若旦那ではござりませぬか。
金之オ阿蘭陀其外皆知つた顔妙な所て
一同 お目にかゝります。

金之 イヤこれは好い所ぢや茶屋の前て見ると違ひ、奉行様のお玄關先其積り
でやるであらう。
藝子も気が張つてなりませぬ。

金之 圖らず私もお相伴好い話の種ぢやわい。
門邊大和守家來從へ出づ。

主六 それ隨て相勤めい。

阿蘭 へい、かしこまりました。さあ、始めた。
阿蘭 始めたく。

歌

めてたやな、君が代は馬場の松の音立てず、大川の水に波もなく、入
り舟出舟エイさつさ、魚市米市青物市山に林に咲くや此花よしやし、
こがねの花は風にも散らず、いつも春なる浪花津は飲めや歌へや舞へ
や踊れや道頓堀の底抜けて、新町橋の折れるまで、やあとこせり。
お陰まゐりは茲へもござれ、天神様に生玉や坐摩や御霊の神々の御輿
かたげてよい、汗になるともよいとやあ。

其二 同書院

上手に床民可使由之不可使知之と大書したる掛物をかけ前に卓獅子の香爐を載す横に遠柵あり此方襖

大和守書簡を見て居る。

大和イヤ矢部殿も案外ぢや容易ならぬ奉行職心得振を尋ねたに唯一人の與力の隠居平八郎のあつかひ方心添へとは片腹痛い悍馬にもせよ虎にもせよ此大和には腕があるそれしきの事問ひはせぬ名程にもなき駿州の跡を受けたるしるしには彼は固より與力同心指の先に使ふて見しよう三奉行も不自由な江戸より遠き此大阪憚る者無き町奉行存分切つて廻してくれうか(微笑す)

玄六出づ。

玄六 申上げます、大木屋金之助殿裏門よりまゐられましたとござります

大和 フム、これへ通せ。

玄六 ハツ。

直に金之助を案内して出て自分に入る。(入る)

大和 オ大木屋の子息先刻は人目もありわざと言葉をかけなんだ。

金之私も御遠慮を致して控へて居りましたが、中々動き相にもござりませぬ故歸る振を致しまして、裏門から這入りました。

大和 して御親父はな。

金之 父が参る筈でござりますが、少々差支へがござります故私から申上げます。いよく今歳も不作の上西國のお大名方へ用立てました金高がいつもより多分でござります故入津米もござりませぬ唯此上は圓米あれは如何なされ

ます御内意の所をお伺ひ申します。

大和 江戸へ丈は送らにやならぬが市中の所は我一存どうともなる事ぢやて。

金之 (金包を出し)これは暑さのお見舞まで、輕少なから差上げます。

大和 (手に取り見て)これは毎度氣の毒ぢやなイヤ市中はおろか京へても一粒とてやりはせぬ若し内々て買ひに來たら——さうぢや召取つて入牢さう。

金之 それで安心致しました。お蔭で大分儲かります。

大和 どうぢやけふの相場はな。

金之 二百匁でござります。

大和 大分面白うなつて来たな。

玄六 急いで出づ。

玄六 申上げます。

大和 何事ぢやあわたしいし。

玄六 参りました。

大和 参つたとはそりや誰が。

玄六 大鹽が参りましてござりまする。

大和 返返せと云ふたぢやないか。

玄六 格之助ではござりませぬ、平八郎でござりまする。

大和 なに平八郎——平八郎とて同じ事、逢はぬと云へば決して逢はぬ。

玄六 それでも中々聞入れませぬ。

大和 聞かぬとは何事ぢや、茲をいづくと思ひをる。

玄六 どこであらうが聞きませぬ、常てさへ剛い髪逆立つて額に青筋かれこれ申せ

ば蹴飛ばして上り相てござりまする。

大和 イヤ言語道断よし逢ふてやらう、逢ふて直々壓へてくれるわ。

金之 それでは私はあちらにて。

大和 さうぢや暫く待つて居られよ。

金之 後程お目にかゝります。

大和 (黙禮して) それ平八をこれへ呼べ。

玄六 かしこまりました、(三人入る)

直に中齊、羽織袴、刀おつとり、急ぎ足にて出づ、顔見合して互に無言。

中齊 (暫くして) イヤ、なににお奉行格之助を以て此程より再三の建議、御一覽なされた

大和 何か長々と書立てたが、一通りは目を通した。

中齊 何故お答へなされぬな。

大和 答ふるまでも無き事故。

中齊 答ふるまでも無き事とは何を何とお読みなされた。

大和 何といは字の通。

中齊 讀んで御解得なされてな。

大和 知れた事。

中書 イヤこりや御解得無いと見ゆる。

大和 解得せぬとは不禮てあらうぞ。

中書 御解得あらば答へある筈、答へなきは御解得無き故、こりや改めて申上げん、よつく御聞き下さるべし。四海困窮なす時は天祿長く終るといふ、古人の戒、今茲に年々の不作、あまつさへ地震大風、惡疫まで流行なし、米價の高直、古今比無し、饑る者數知れず、勿昧無くも禁裏まで、乏しくらせ給ふ由、何故お救ひなされぬな。

大和 そりや我方寸にある事ぢや。

中書 然らば御意見伺ひたい。

大和 云へばとて詮無事。

中書 イヤ是非々々御意見伺ひたい、いかなる御案あるかは知らねど、圓米を打開き、一方には市中の奸商價を食り押隠すを、出さすより外ござるまい。

大和 圓米は非常の爲、殊に來春は將軍家にも御隠居なされ、御代替る上からは、御物入は知れた事、それに唯今倉開かば、忽ち後の御役料、御合力米に差支へん。

中書 イヤ非常の爲なら唯今こそ、非常の時ではござらぬか、將軍家の御代替り、そは

太平の時の事禁裡さへ御不自由をよそにして、何將軍四民の嘆聞きながら、知らず顔して何奉行きのふも饑死せし者ござる、今も路に倒れし者あり、一日措けば一日と、まさる四海の苦を何故お救ひなされぬな。

大和 エイ其方の指圖は受けぬわ。

中書 指圖は致しませぬ、見過し難き天下の大事申上げるが務てござる。

大和 其方は隠居でないか、入らざる差出ぢや控へて居れ。

中書 役こそ退きたれ、心まで隠れば致さぬ、四民の病は我身も同然、唯一人の苦さへ餘所にせられぬ、我心まして天下の苦を退て見られませうや。

大和 それも天災なれば是非が無いわい。

中書 天災なれば人力にて防々こそ道てござる。

大和 力及ばねばそれまでぢや。

中書 及ばぬ事がござらうや、断じて爲さば鬼神も避くべし、天にかこつけ事爲さぬは、単怯てござらう、懦弱てござらう。

大和 なんと。

中書 よしました勇氣無きにもせよ、心無き者ござるまい、惻隱の心無きは人に非ず、あ

奉行にはこたへませぬか。

大和 だまれ無禮ぢや控へて居れ。

中書 いゝや控へて居られませぬ。高さも遠きも憂は一つ。聖賢の道聞かれずとも是非の心にお尋ねなされ。

大和 だまれくくく。聖賢の道聞かずとは、此大和守を侮るな。

中書 イヤ賊を申すに言葉は飾らず。

大和 言語道断下れく。

中書 すりやかほど申しても？

大和 物にはそれく。道がある筋違ひの其方等、何を云ふとも聞く間はないわい。

中書 聞かれずばこれまでぢや。しかし此儘止みは致さぬ。これより外に工夫なし是非共救助せにやならぬ。

大和 何となと勝手に致せ、しかし此方へはもうまゐるな。

中書 無論でござる。

大和 (跡を見送り) 憎むべき奴ぢやわい。

中書 無論でござる。

大和 (跡を見送り) 憎むべき奴ぢやわい。

金之助 助もと襖を開きて出づ。

(席を蹴立てゝ入る)

金之助 奉行様——

大和 アこれ——密にく

其三 大米屋奥座敷

正面大床三幅對の晝をかけ、前に卓を置く。其上に香爐花瓶あり、横の遠棚には手鑑、食籠、銅瓶、半鏡、檀木拂子、文臺に硯箱、一方に蓋子茶具を備ふ。前庭築山あり、泉水あり、石灯籠、錦井戸、手水鉢、杯いづれも珍奇なるものばかり。倉屋重兵衛、錢屋多兵衛、太田屋、徳右衛門、榮屋、利右衛門、皆大家の檀那の風、下手に主人、金右衛門、坐す。會席料理にて酒宴の体、初夜。

重兵衛 扱々見事な此御普請、申分はござりませぬな。

多兵衛 それにお道具が何から何まで第一お床の三幅對、龍虎に観音は誰の筆でござります。

金右衛門 牧溪でござります。

徳右衛門 えらいものがお手に入りましたな。

金右衛門 京の去る風々から、内々お拂ひになりまして、五六日前手に入りました。

利右 それにあの蓬萊の香爐は珍らしいものでござります。

金右 われは明代の出来とやら、長崎から取りよせました。

重右 あの釜は大分變つて居りますな。

金右 われは紹鷗が用ひられたものでござります。

多兵 此茶椀は聚樂燒失禮ながら三百金以上も出しなされたか。

金右 五百金で求めました。

總右 なに五百金！これは恐れ入りました。

金右 秀吉公が北野の茶の湯に、お使ひなされたものでござります。

利右 それでは五百金でも千金でも、お厭ひはござりますまい。承はれば西の新田と

うくお手に入りましたとやら。

重右 それは結構何しろ今度のお奉行は譯の分つた方故、互に好都合。

金右 いや分らぬ人でも金次第譯もない事てござります。そんな俗な話より、今度

京から取りよせました鴨川の水を煮て、

多兵 なに鴨川の水？

金右 鴨川もずつと上手、人氣のない所を撰びました。

總兵 それは何より

四人 御馳走でござります。

金之助出づ。

金之 唯今歸りましてござります。

金右 悴かしてお奉行のお返事は、

金之 お奉行様は奴い都合、万事お見込通りでござります。

金右 それなれば跡でゆるく、そちもお相伴をするが好い。

重兵 さあ、こちらへ。

金之 どなたも御免下さりませ。

銀兵衛出づ。

銀兵 旦那様へ申し上げます。大鹽平八郎様が見えましてござります。

金右 なに大鹽――

金之 エイ、茲へやつてうせたか。

金右 そなたどこぞで逢ふたのか。

金之 今お奉行様のお邸で無法な事を申しました、ありや氣違ひ早ういなして、おし

まひなされ。

金右 さうぢや遂に逢ふた事もなし、殊にけふは客來なり、味よう云ふてことわるが
好い。

銀兵 いえ、是非共旦那様や皆様もあいてなら、尙御一所にも目にかゝると、坐り
込で居られます。

重兵 なんぢや我々にまで逢はふとは、

多兵 氣味の悪い人ぢやなわ。

銀右 何は然れ今は隠居。

和右 かれこれ云ふ身分て無し、

金右 さうぢや兎に角逢ひませう、まあ此へ通すがよい。

銀兵 かしこまりました。

金之 しかし御用心なされませ、何をいふかも知れませぬ。

銀兵 衛案内中齋出づ。

金右 さあ先づ此方へお通り下され。

中齋 御免(上座につく)始めて御意得申す、拙者大搦平八郎。

(入る)

金右 私(は)主人(は)金右(は)衛門。

重兵 私(は)倉屋(は)重兵(は)衛門。

多兵 錢屋(は)多兵(は)衛門。

銀右 太田屋(は)銀右(は)衛門。

利右 榮屋(は)利右(は)衛門。

金右 これなるは、悴金之助でござります。

中齋 それはお揃ひにて尙重疊かく俄に参りましたは、折入つて御相談致したい義
がござつて。

金右 なに相談と

五人 あつしやるは、

中齋 さればてござる方々にも御承知の近年の不作、天變方々こそ不足無く、かく酒
宴に暮さるれど、一足外へ出て見られ、餓る者倒るゝ者、我から身を投げ死す
るもあり、我手に救ふも一人ならねど、兎ても届かぬ諸人の困窮、依て方々に相
談致す、何とぞ拙者に應分の金子を貸しては下さらぬか。

金右 なに金子を

五人

貸せいと云。

中齊 されば——拙者として富まぬ身の産を傾け出せばとて何の益にもなりませねば方々に借用なし、これを集めて窮民に施し分けなば幾分か當時の難を救はるべし。さればとて徒に借用致す譯ならず拙者の家祿を抵當に差出す所存てござる。何と聞ては下されぬか。

金右 これは何とも御即答致し難き大事のお話。先づ兎も角もお歸り下され、ゆるゆる跡にて相談致し。

中齊 いや御思案までもない。毎日に迫る世の困窮人間ならば救はにやならぬ、まして溢るゝ家倉の富貴の身には尙更ぢや。

金右 それは承まはるまでもなく、よく分つて居りますが、何分大事のお話故、中齊 大事とは金が大事か、世の困窮こそ何よりの大事ではござらぬか。

金右 それは、

中齊 まして方々の此富貴、こりや我力にて得られしか。

五人 エイ?

中齊 幸運の蔭政事向請負用達株相場利を専にせらるゝ故利はあつから利を生

て、坐ながらにして此驕奢。

五人 何と。

中齊 少しく其身を顧みて、不運の者を救はずは天の責がござるぞよ。

五人 エイ。

中齊 それとも知らぬと云はるゝか。

五人 それは、

中齊 奉行所との間柄公に調べて見やうか。

五人 それは、

中齊 飢饉に附込み米相場貪る者はあるまいか。

五人 それは、

中齊 けふの酒宴も貧者の涙か。

五人 エ。

中齊 よもや否とは云はれまい。

金右 イヤそれでは晩までお待ち下され、直様相談致しませう。

重兵 ほんにそれく夕方までには相談きめ、お宅までお返事をなわ皆様。

多兵 左様々々申し上るて

五人

ござります。

中齋 然らば晩まで相待ち申す急度返事下されい。

金右 確に承知致しました。

中齋 拙者はこれより知邊をまはり、同志の者をかたらはん各々にもそれぐに此義を傳へ下されい。

四人 かしこまりましてござります。

中齋 然らば返事相待ち申す。(立つ)

金右 (金之助に) それを見送り。

金之ハツ

(中齋を送りて入る)

重兵 扱えらい事を云ふて來られた。

多兵 返事の仕様に困りましたなあ。

徳右 何は然れ皆様にはどれだけお出しなされます。

利右 どれだけでもこれだけでも先づお出しなされますか。

重兵 さそこが第一御相談ぢや。

金之助出づ。

金之 いえ先程もあんな事でも奉行様と大論判——

金右 なに奉行と大論判?

金之 つまりはねつけられましたわいな。

金右 フム——お奉行さへお用ひなきに私の此救助こりやあの人の名聞かよし真心からするにもせよお奉行の御意に背き跡でも叱りあるかも知れず兎に角これは伺ひませう。

重兵 ほんにさうぢや、こりやお奉行へ内々て伺ふて見るが

二人 第一でござりますな。

徳右 しかしそれでは隙取る話

金右 いや今始まつた事でもござらぬ貧乏人は昔から庭の蟻よりうぢくと、なやむも皆自業自得働ささへすりや食へぬといふ譯は少しも無い筈ぢや、或は自墮落其身の愚鈍今となつて騒いでも我等の知つた事ではなし、折角の此茶の湯味が悪うなりました。

単の次郎七金箱をかへて石灯笼の陰より出つ、あたりを見て箱を井戸

湯味が悪うなりました。

単の次郎七金箱をかへて石灯笼の陰より出つ、あたりを見て箱を井戸

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

湯味が悪うなりました。

の端に置き、そと座敷へ上りて香爐茶碗など取り、また箱もかゝへて冷笑して入る。

金之 ほんに左様でござります。それにあの大壺は親子とも高慢な人に金を借りて来て、むかつく様な當言いふとは顔を見ても腹が立つ。あんな者に一文でも貸してやる譯はござりませぬ。

重兵 さう云はるれば、

四人 それもさうぢや。

金右 そんな事は鴨川の水に流して今一椀、どれ松風を聴きませうか。

金之 ヤ、茶碗がござりませぬ。

金右 今そこへ置ておいたが。

重兵 オ、あの香爐も見えませぬ。

金右 どうもせぬのにとこへ行たやら不思議な事があるものぢやなあ。

銀兵衛 あわたくしく出づ。

銀兵 旦那様、盗人が遁入りましてござります。

金右 なんぢや盗人。

銀兵 お取込をつけ込で、いつの間にかやら忍び入り、千兩箱を取りました。皆 エイ。

金右 それでは茶碗も香爐も、

金之 同じ奴が持つて行たか。

金右 イヤどこから遁入つてうせたのぢや。

銀兵 今になつて思ひますと表から遁入つて来て、奥蔵からこゝまでも思ふまゝに盗み取り、また表へ出たのでござりませう。

重兵 とても大膽な

四人 其仕方。

金右 いや盗人が表から遁入つて来るのを知らぬといふたはけた奴があるものか。

油断も油断も大油断ぢや。

銀兵 これは恐入りました。

金右 恐れ入つたて済まぬわい。金子は元よりあの茶碗容易に手に入るものと思ふか。

金之 それにあの香爐は大阪中さがしても似たものでもござりますまい。

重兵 上り掛物をはづしませなんだ。
 金右 それまで取られてたまるものか。
 多兵 かう大勢揃ひながら、
 銀兵 それも御油断でござりますな。
 金右 エイあの大盛の來た間か。
 金之 忌々しい事ぢやなあ。
 (立上る釜につまづいて落す烟立つ)
 昔 ヤこれは、
 金右 エイ粗相すな、灰だらけぢやわい。

第三段

其一 洗心洞 塾

正面の壁に日課を揭示す、

毎晩卯上刻取枕席讀新理書讀終退而讀其書十過然後讀舊理書十筋
 習書而後寫字而後誦詩酉中刻就寢

上手に學堂へ通ふ廊下あり下手玄關本箱机を並へ書生四人並て居る。

一生 (朗吟す) 兵可用酒可飲
 海内何州當此品
 屠販豪俠墮地異
 腹貯五洲水滄々

二生 これ君止め給へくまだ日課も済まぬ内大きな聲で詩を吟すとは打たれるのを覺悟ぢやな。
 一生 なに打たれる譯はない、僕はけさから傳習錄三卷共通讀した。
 三生 嘘を云へく十行一日に讀だとしてさう早くしまへるものか。

一生 それは君等とは違ふわい飽くまで腹に遣入つて居るから本をあけても讀む所が取りも直さず知行合一。

四生 ハ、ハ、例の駄洒落に閉口々々

一生 それに今の攝州の歌は先生の無二の知己三十六峰外史の作ぢやよし先生に聞えたとして立腹せらるゝ筈はない。

二生 ほんに山陽先生も惜しい事に無くなられた内の先生も取りあへず三本木へかけつけられたが値の事で間に合はず落膽して歸られたそれからの塞ぎ様
三生 いやありやそればかりぢやない昨今の飢饉の事でお奉行へ建議せられたが少しも用ひられぬ故を思案をせられるのぢや。

四生 また今のお奉行は前のと違ひ無能の人物先づ近年では矢部駿州其前の高井山城。

二生 高井の時分は先生も殊の外用ひられ兵庫から大阪中事實支配をなされたが功成り名遂げ身退き尙世を思ふ御赤心。

三生 聞けば大米屋始め金持へ金を借りに行かれし由。
四生 それで分つた下女下男を背いなしておしまひなされ奥様が飯焚に先生自身

庭掃除これでは僕等も見て居られぬ何なとせにやならぬてないか。

一生 君は川流を汲め我は薪を拾はんか。

二生 いやてんごぢやない本間の事ぢや柄に應じて役を割らう先づ僕は玄關から座敷の方を引受ける。

三生 それでは僕は學堂掛塾は君の役目ぢやぞ。

四生 いや僕は使役豆腐屋でも八百屋でも菓子屋最得意の所君は定めて酒屋であらう。

一生 いや僕は唯飲む役ぢや(又明吟)

酒可飲兵可用

海内何州常此品

湘田濟之助庄司儀左衛門平山助次郎大井正一郎いつれも羽織袴外より入り来る。

二生 これはくお揃ひにて。

齊之先生はな?

三生 書齋にあらしてござります。

儀左 一寸も取次ぎ下されい。

四生 かしこまりました。

正一 いやなに方々承はれは先生には此度下部を御出しなされ薪水の勞を御自身になさると云ふ事ぢやが其通りでござるか。

一 生 左様でござります、今も我々まで役割をさめる最中。

儀左 恐れ入つたる御はからひ感涙を催し申す。

助次 いや日頃の御氣象では其管でござらうか。

齊之 して金子は調ひましたか。

三 生 詳しうは存じませぬが、どうやらまだらしうござります。

儀左 なにまだ？

正一 いやべん／＼と何隙取り、一日とて猶豫せられぬ市中の様子は益逼迫濟之こりや早うお目にかゝりたいものぢやわい。

格之助 奥より出づ。

格之 これは方々父は唯今陽明先生を祭るとして其文章を起草の半先づてなたへお通り下され。

儀左 なに陽明先生をお祭りとな。

格之 されば學ある者は氣力無く、氣力ある者は學無き中に先生獨り學あり氣あり、賊を討ち世を開き、行を尊び知を明にし、聖賢にしてまた豪傑、憾むらくは櫻絶え我邦にては唯一筋一齋翁すら心のみに口には憚る附甲斐なさ、恰も迫る昨今の危急に愈々感激なし不朽の英靈祭り申す。

儀左 何さまこれは適切ぢやなあ。

宇津木 矩之丞 若黨友藏つれ旅裝束にて出づ。

女藏 (玄關にて) 頼まう。

一 生 どーれ(出る)

矩之 宇津木 矩之丞でござる。

一 生 はあ(此方へ來りて) 宇津木 矩之丞殿が見えました。

齊之 何宇津木。

儀左 めづらしい矩之丞殿。

格之 早々これへ通すがよい。

一 生 ハッ(玄關へ出て) お通りなされ。

矩之 御免(草鞋)を解きて上り(ヤ)これはいつれも揃ひにて、
格之 先々御無事、

五人 重畳々々

矩之 して先生には?

格之 父も恰も在宿致せばいざ此方へいづれにも、

矩之 然らば方々、

齊之 いや先づお先さ、

矩之 御免下され、

(音上手へ入る)

其二 同 臺所

正面障子立切り前に竈あり上手に井戸あり其向庭へ出る戸口あり下手に
表より入来る中の戸口あり、

中齋妻ゆう手拭をかぶり手櫛をかけ水を汲む、

ゆ 馴れぬ事と一杯の水を汲むにも此通り裾から袖をぬらしました。こんな事
では下女にも及ばぬ。よう今まで使ふた事ぢやなあ(釜の下を焚きつける)ア、

煙たい目が痛む。したが此煙さへ上げ兼ねる者も多い時節三度の御飯をいつ
もの通り戴くのも勿躰ない。どれ盡の餘りを結びにして、ひもじい者にやりま
せう、

美好五郎兵衛染物屋の躰、みねをつれて表より入来る、

五郎 御免下さりませ、奥様にお目にかゝりたう存じます、

ゆ オ、五郎兵衛さん久しう見えませなんだなあ(手拭を取る)

五郎 ヤ奥様これは失禮致しました。ほんに承はりましたが、御自身に御飯をしらへ

とは勿躰ない、今更涙がこぼれます、

ゆ 何のく世間の事を考へたら、當り前てござります。そしてまたおみねにはど
うして戻つて来やつたのぢや、

五郎 さあ昨日歸つてまゐりまして、今度残らずお召使へお暇が出たと申します。故
それは何をいふぞちは外の者と違ふ命ばかりか家も立ち、今の暮しも出来る
様何から何まで御恩を受けた、お禮心に上げた躰さういふ事ならこれからは、
皆の事を一人して働かねばならぬ所と叱つてつれてまゐりました。どうぞ以
前に變りませず、お使ひなされて下さりませ、

ゆう それは親切にかたじけなう思ひますが、おみねは殊に仔細もあり、
みね エイ、

ゆう 旦那様から御自身に、お掃除をなさる位、臺所は私の役、何でもない事でございます、
ます、

五郎 いえ、それでは済みませぬ、私の御恩は別に、多くの人の御師範なされ、
廣い世間に類少ない先生様、海山の珍珠を差上げ、金銀の家にお住ませ申し、綾
錦を着せましても、まだ足らぬ身の上、それにかう申すと失禮ながら、お邸と
て此通り賤しい業を御自身に、奥様まで御飯たき、何たる事でございます、世の
町人百姓でも、何十人の召使、日毎の珍膳、蜀江の錦を不斷着て居ります、こんな
間違うた事はござりませぬ、

ゆう それは私も日頃から思ふたばかり云ひませぬが、物も知らず、技も無く、愚者で
も榮耀榮華、それ羨むてはなけれども、折ふし不足のある時は、つい愚痴の出る
もの旦那様に申上げて、一返に叱られますが、捨て置かれぬ臺所、まだ烟は
絶さねど家祿まで出さなされ返す時は、とても無い大金をお借りなされ、此
後何となる事かと、寝られぬ時もございます、

五郎 ほんにそれも承はりました、情知らぬ大米屋何の唯出しませう、先て何を云ふ

かも知れず、こりや御安心が出来ませぬ、

ゆう 心ある者は力無し、力ある者は心無し、何としてかう違ふやら、私が若し奉行
か將軍様か、神様か、思ふ様になつたなら、正しい人賢い人には、祿もやり褒美も
やり、愚者悪者は下部の役を當て様に、夢にも出来ぬ此世の中、高楊枝の味はつ
らいものでござります、

五郎 御尤でござります、ほんに、分らぬ世の中、せめて私共の心だけ、これからは
お掃除に、朝晩私が参ります、臺所向は此娘、一切おさせ下さりませ、どれ庭か
らはきませう、箒はどこや、手桶が見えぬ、それ御飯が吹て来た、(みねに)エイ、
ぐ、と何して居る、早う手櫛をかけんかい、手櫛が知れずば肩でも脱げ、

二女 オホ、ハ、ハ、

五郎 どれ、御免なされませ、(箒をかゝりて庭口へ入る)

ゆう 五郎兵衛さんの親切な、いつも喜んで居ますわいな、

みね 氣ばかりいら、致しまして、お役には立ちませぬ、

ゆう したがそなたはどうしても歸つて貰はにやなりません、

みれ そりやまたなせてござります

ゆい 障はそなたに覺えがあらう。

みれ エイ

ゆい 旦那様はあの通り万事殿しいお方なり、殊に多くの書生の手前、一沙心をつけねばならぬ。それに万一人目につき表向となつたなら、義理にも捨て、は置かれませぬ。おなさは厚うても、それに引かれぬ御氣象ではどう御所置をなさらうやら案じられてなりませぬ。幸今度の總お暇、これを汐に引下り、しばし遠ざかつて居る内には、折を見てお願ひ申し、世間晴れてそへる様はからふて上げる故、今の所を謹で、一先づ内へ歸つて下され。

みれ お叱りもなく其お言葉申し様もござりませぬ。したが賤しい私風情、とても望はござりませぬ。

ゆい いや假令身分は違うても心は違はぬ。そなた親子、其心こそ何よりぢや侍でも大名でも心違へば穢多同然。その所は心配せず私に任して置きやいなう。みれ 難有う存じます。

格之助奥より出づ。

格之 母様母様(みねを見て)ヤこれは——イ 父上が召します。

ゆい そんなら後程ゆつくり遊んで行きやいなう。(奥へ入る)

格之 これおみねどうしてまた戻つて來たのぢや。

ゆい さわお聞きなされませ。一旦内へ歸りましたら、父様が濟まぬといふて、一所に唯今参りました。

格之 そしてまた居るになつたか。

みれ いえ、矢つ張居られませぬ。二人の中を奥様が、よう御存じてござります。

格之 なに御存じ、どうしてそれは?

みれ どうしてお目に留つたやら事を分けてのお諭しに私や顔が上げられませぬ。んだわいなわ。

格之 してどうぢやこれぎりに別れてしまへとおつしやつたか。

みれ いえ今暫く遠ざかつたら、其内に旦那様へ願ふてやると仰しやりました。

格之 なに父上へ——フム——

みれ 何を濟まぬお顔付、あなたはあ厭てござりますか。

格之 それでも人の思わくや、第一父上に面目ない。

みれ そんなら添ふ氣はござりませぬか。

格之 無い事は無けれども所詮許しある筈もなし、お叱りを受けるばかり。

みれ 矢つ張望はござりませぬか(泣く)

格之 いや、しかし母機が其お心では、またどうかなるてあらう。

みれ いえ、望はござりませぬ始から其覺悟あきらめて居ります。唯一つ願ひは時々お顔が見られる様——

格之 エイどうかなるると云ふに。

みれ 私ばかりぢやござりませぬ見せたいものも出来ませぬ故。

格之 さてはそなたは——

ゆう 五郎兵衛左右より伺ふ。

みれ おはづかしう存じます。(俯む)

格之 こりやどうしたら好からうなわ。

ゆう (前へ出て)御飯はもう出来ましたか。

みれ オ、まだ移しも致しませぬ。

五郎 (出て)役に立たぬ不束者つれてまるつて結句お邪魔お叱りない中下りませ

う。

ゆう いやまだ話したい事もあり、まあゆつくりと夕飯でも——

五郎 どうしてゆつくり出来ませう知らぬ事とて済みませぬ。

ゆう いや知らねば済まぬ今の事。

格之 エイ。

ゆう 私も篤と思案して、好い様にはからひませう。

みれ 難有い其お言葉、どうぞ願ひ——

五郎 エイ阿呆め、何云ふのぢや若し先生様のお取へ入つたら——

ゆう 何の入れて好いものか、そこにぬかりはありませぬわいなあ。

五郎 重々のお志、イヤ此五郎兵衛も一思案活さかへつた上からは、まだ命がござり

ます。若旦那。

格之 エ。

五郎 何とか工夫致しませう。

ゆう そんなら重ねてとつくりと。

五郎 こりや御面倒でござりました。

其三 同書齋

床に王陽明の畫像を掛け前に卓を置き其上に祭文を載す。横に書棚あり、多く和漢の書籍を積む。一方に窓あり、其下に机をすゑ、机上筆墨硯紙を置く。總て秩序正しき牀、下手に廊下あり、前は庭松の古木あり、其陰に池あり、此方に切戸あり。

矩之丞濟之助儀左衛門助次郎正一郎向ひ坐す。

濟之 していづくまで行かれたな。

矩之 されば別れ申してより、山陽道を下の關九州に打渡り、文に武に名ある人々、殆ど殘さず尋ねました。夕陽村に葉落ちて、遠思樓の窓薄く、日影衰ふ文學に、武藝も思ふ程もなし、イヤ世も末になりましたな。

正一 世も末とは老の操言若き者は改むべし。

濟之 人より政事要害は？

矩之 政事とて人にあるもの、備前も蕃山の名のみにて、肥後に時だつ城廓も思ひやるは古將軍、要害のみはこれより西先づ第一でござらうか。

領左して薩摩へは入られたか。

矩之 薩摩のみは關所厳しく、拙者も意外の疑受け、遂に入る事かなひ申さず。

助次 して長崎へは？

矩之 長崎へは寄りました。我が邦にてもまた格別著しきは異國船、小城浮べし如くにて、瞬くひまに右左町を震はす筒音には思ひしより驚きました。

正一 それ山陽先生より、いつぞやお話し承はつたが、親しく見たきものでござる。

書生 逃來る中齋刀を抜て追ひかけて出づ。

濟之 これは何と。

五人 なされます。

中齋 いや此困窮の世を顧みず、酒に亂るゝ不届奴。

書生 いえ飲みは致しませぬ、酒飲むべし、兵用ゆへしと、吟じたばかりでござりまする。

中齋 飲まずして色に出づるか、殊に其酒は商人より、賄賂として取つたであらうが。

書生 それは。

中齋 一物すら故無くして、人より受くる事ならぬと、日頃の戒打破り、塾を汚す不徳

の振舞免す事相成らぬ。

香生 ても今の世の中は、お奉行でも老中でも、賄賂は殆ど表向

中書 だまれ此奴其悪風を正さんと、いつぞや我へも贈りしを白洲へ擲ちこらした

香生 それは金がござりませぬ故。

中書 いやいよ、卑しき其根性打て捨つるそれへ出よ。

濟之 先づお待ちなされませ、善無く悪無きは心の跡と兼てより承はる。

儀左 よく、氣質をため直し、御學風に歸し申さん。

助次 過ちても改むれば君子となるを害せずとか。

正一 それ早くお詫致せ。

香生 へい、御免下さりませ、以後を急度改めます、酒呑むべからず兵用ゆべから

中書 いやまだ酔醒めぬ、其言葉刀の切味知らしてやらう、振上る。

矩之 アいや暫く山陽先生よりいつぞやの御刀のかへしとて作り置かれし此一時

中書 (廣げ見て) なに、

君 刀 疑 經 斬 姦 邪

魚 腸 紋 雜 血 痕 風

吾 書 字 々 頗 類 此

此 是 千 古 英 雄 血

矩之 筆と劔とかはれども、英雄ならずは、大姦の血汐を瀝く、御刀彼等如きにお汚し

あつては、外史の句意も如何やら。

中書 げに人去りて尙殘る、友の心のうれしさよ。

濟之 然らば免しなされませるか。

中書 オ、殿しく以後を戒めよ。

儀左 ハッ、それ早う次へ立て。

香生 ハア、難有う存じます。

中書 ア過ぎし舟遊の、其折も戒められし我氣質變化なしても尙殘る、剛毅の癖は我

學風イヤあれ程までに懲さずば肝に銘ずるものならず。

濟之 いやまた世上の儒者、扨と門戸を構ふる者共は、文の心はよく解けど、人に憚り

世に阿ねり言葉左右に筆曲ぐる単法者ばかりにして、
儀左 殊に權門豪家へは折がなあれば出入なし貧しき者には目もかけず昨今の飢
饉すら救治の策もめぐらさず。

正一 言行いつも相違して無爲無能の儒者文人無知無學の老中奉行
助次 さればこそ先生が口にお教へあるばかりか手に救はんと此度の
矩之 あの返答は、

五人 ござりましたか。

中書 いや今以て答へぬのぢや。

助次 何さま少しの金ではなし、いかに豪商なればとてさうたやすくは出されもす
まじ。

正一 いやよのつねの時と違ひ、日にくまざる世の困窮
正一 ひとりや拙者罷り越し殿しく談じて見申さん。

助次 いや先生御自身もいはいさへ即答致さぬもの共なれば貴殿にては尙の事
正一 彼此申さばおびやかかし刀にかけて出さし申さん。

助次 それはまた餘り不作法いかに殿しき學風とて左様な振舞なされては先生の

眞似損ひ。

正一 いや世の爲なれば是非共に出さしにやならぬてござらぬか。

助次 それでも出さねば是非がござらぬ。

正一 貴殿は甚無氣力ぢやな。

矩之 いや争はさて置て各々方には手分けなし。

中書 さうぢや諸方を催促せよ、大米屋へは格之助彼を代りに使はさん、格之助格之
助。

格之助出づ。

格之 何御用でござりまする。

中書 其方これより大米屋へまゐり此間の返答をけふは是非共聞て參れ。

格之 かしこまつてござりまする、御免。(入る)

中書 宇津木にはゆるく逗留先づあなたにて休息せよ。

矩之 御意にあまへ御厄介になりませう。

濟之 拙者は倉屋。

儀左 錢屋太田屋。

助次 拙者は少し所用ござれば、一寸歸宅致しまする。
正一 それでは先生。

中齋 大義ぢやのう。

鐘の音。

(皆入る)

中齋 ア得難きは知己ぢやなあ——指折るに唯一人其山陽に別れてより、ひもときかへすいにしへの鴻儒の文も意に合はず、偶々迫る世の様に空しき胸はいとど尙張裂くばかり思へども、位無ければ益もなく、無念ながらも遊民に頼めど今に調はず、唯いつはりに打向ふ、我真心は同人の志を集めたり、天理遂に衰へずかくてはいつか救はるへし、世の苦さへ除きなば、我病も亦癒えて晴るゝ心は大川か庭の小池も澄めば澄む、水と月との樂は、獨りにても足るならん、池に音あり、やあの音は？(見まはす)才魚が躍つたのか、波無き池に波起すは魚の意か、天の意か——あれ——地上に身を落しはねつまるびつ苦しむわ——早蟻に攻めらるゝ——はてなあ。(腕を組て考ふ)

次郎七金箱を持って松の陰より出て、そと机の上に置いて下手へ行かうとする。

中齋 (見とめて)何者ぢや。

次郎 へい——盗人でござります。

中齋 何と？

次郎 しかしこちらへは千兩箱置きにまゐつたのでござります。

中齋 そりやまた何故？

次郎 そつと行かうと思ひましたに、お目にとまつてしくぢりました。それでは一寸其譯を、旦那、まあお聞き下さりませ。私は此間、大米屋へおいての節、どさくさまぎれに忍び込み、あの金箱を取りました。其時聞た旦那のお話、貧しい者を救はふと、あんな奴等に頭下げ、お頼みなさるお志、ぐつと胸に染込みまして、持て上つた此金子、これは私の志、盗人ながらこればかりは、人間のつもりでござります。どうぞお使ひ下さりませ。

中齋 ハ、ハ、人間は人間ぢやが、物の道理が分らぬな。

次郎 物の道理の分らぬのは、私ばかりぢやござりませぬ。あの大米屋はいふに及ばず、金のある人間に分る奴はござりませぬ。折角旦那のお頼みでも、あれは無駄でござりますな。

中 其方にすら心あれば、彼等にも心はある。

次 其心は慾ばかり溜まれば愈々溜めたるが、金持の皆根性何の一文でも出
しませう。お上のふれか名聞か、つまり得になる事なら出さまいものでもござ
りませぬが、理屈詰にあつしやつても、そんなまだるい相談は、口に風引かすば
かり、それよりは私に、それはお任せ下さりませ。これから倉屋其外へ片づ端か
ら忍込み、千兩でも万兩でも、黙つて取つてまゐりませう。其方が早手まはし、却
つてお役に立ちませう。

中 いや、こりや某も賊に落すか。

次 めつさうな事あつしやりませ。盗賊所か聖人とか、仁者の旦那の手先につき働
いたら、罪亡ぼし。

中 何の罪が亡ぼふぞ、悪を消すは善ばかりぢや、志は善にもせよ、盗みなさば同じ
盗賊、それを使はし我も盗賊。

次 盗すりやどうでも私の、

中 不正の金が役に立たうか、早々元へ返してまゐれ。

次 元へ返さば倉の塵、それでは直々施行して、(行きかける)

中 盗賊待て。

次 盗 エイ?

中 我も昔は與力なり、盗賊と知りながら其儘出す事ならぬ。

次 成程、これは御迷惑、そんならどうぞ細打つて、お突出し下さりませ。旦那の手で
打たれましたら、本望でござります。

中 我打つ細は、仁義の細、入牢さすは洗心洞。

次 盗 。

中 道義の法を教ゆるぞ。

次 盗 いや、それはいけませぬ。盗賊は私の業、これに死ぬに極めました。

中 盗 いや、其方として生れながら盗賊でもあるまいが、よし氣質曲るにせよ、變へられ
ぬ事あるまい。

次 盗 それにまんざら私でも、三つ子の内から盗みはしませぬ。貧乏ながら親は堅氣
私も、錢屋へ奉公する中向の息子の、おろかもの悪戯かうじて、火事遊、晝日中火
をつけて家を焼いた其咎を私にぬすくりつけ、分疏しても主と金、役人に取り入
つて、理を非に曲げて、揚屋入り、中で覺えた盗みの術、半まで破つて出てからは、

金持が憎うなり、盗みに入るも敵打ち、人殺しはしませぬが命二つあつても足らぬ、罪深い此時今さら何を聞きましても、もう遅うござります。
中 齋 いや死ぬまでは遅うない、よしまた生きて居ればとて道を知らずは死人も同然。

次 耶 でも道知らぬ人間が、生きて居るばかりか、榮耀榮華をして居ります。

中 齋 そりや夢の目で見える故ぢや。
次 耶 夢かうつゝ、か知りませぬが、坊主まで肉食妻帯、一寸先は闇の世の今を助かる御利益は佛様にもござりますまい。

中 齋 佛にないが儒門にある。

次 耶 あの御利益が？

中 齋 いかにも。
次 耶 いやこれは得心出来ませぬ、早い話が旦那でも、矢つ張金を金持に、借りにおいでなさるではござりませぬか。

中 齋 いや金は借りても救ふは心ぢや。
次 耶 其心ばかりでは、御利益がござりますか。

中 齋 心が無くは利益もない。

次 耶 いや金がなくはござりませぬ。

中 齋 さて、悟りの悪い奴ぢやな。

次 耶 旦那もまた御正直な私はどうても金が敵しかしいつまでか、つても盡きぬ金銀まさる罪咎大きな事を最後にして、娑婆の埒をあけるつもり、幸のお催ほしめては、餘所にお志私丈にいたします、まお御覽下さりませ。

中 齋 いや不正な事は決してならぬ、予のわづらひとなるであらう。

次 耶 何の御迷惑かけませう。しかし悪を懲すは悪が一番私がお好いか旦那が好いか、どちらが餘計利益になるやら、其内また上ります、(行きかける)

中 齋 いや待て、まだ云ふ事あり、一度篤と諭してやらう。

次 耶 いや御講釋には及びませぬ、八坂の婆より邪宗でも、盗人にも宗旨がござります、仲間の道は云はぬが法、これはお邪魔を致しました。

中 齋 あこりや、——参つたか——一癖ある面魂用ゆべき奴なりしに、脱き伏せざりしは残念ながら、盗人にも道ありとは頼もしき人心、誠に道は天体なり、かくては無學の町人として、一しは心無ければならぬ、早う返事が聞きたいものぢ

やわい。

格之助走つて出つ。

格之 父上無念でござりまする。

中寄 どうぢやあなたの返答は、

格之 不禮極まる町人共今日まで捨置て今となつて断りとは、

中寄 なに断り！

格之 餘りの事にあきれはて、殿しく譯を質せし所お奉行に伺ひしに以ての外と退

けられ是非無き事と逃口上——

中寄 憎むべき奴原ぢやな——私利私欲に眼くらみ世の困窮を顧みず上にかこつ

け謝絶とは！大和守も大和守！己せずばせぬまでよ、人の救助を妨ぐとは非

義非道の奸物共日頃より忍ばれぬ賄賂を以て大役員以賄賂を以て政事を賈

り富豪をかばひ貧者を壓へ此困窮を見殺しに禁裡までないがしるとは道も

情も知らぬよな天も恐れぬ町人共運よきまゝに増長なし坐ながら奢に飽く

ばかりか奸物共と馴れ合ふて不義の富貴を積み重ね飢饉に耳を蔽ふとは罪

人ぢや罪人ぢや此罪人を捨置かば四海は狐狼の巢とならん最早堪忍相成ら

ぬ我せんすべをよつく見よ。

格之 して父上には？

中寄 金銀こそ善へされ金銀にて計られぬ藏書悉皆賣拂ひ貧しき者に施さん本屋

呼べ本屋呼べ。(棚の寄物を投出す)

格之 あの御秘藏の此書籍を？

中寄 古人の心もこれぢやわい。

格之 父上無念でござりまする。

中寄 どうぢやあなたの返答は、

格之 不禮極まる町人共今日まで捨置て今となつて断りとは、

中寄 なに断り！

格之 餘りの事にあきれはて、殿しく譯を質せし所お奉行に伺ひしに以ての外と退

けられ是非無き事と逃口上——

中寄 憎むべき奴原ぢやな——私利私欲に眼くらみ世の困窮を顧みず上にかこつ

け謝絶とは！大和守も大和守！己せずばせぬまでよ、人の救助を妨ぐとは非

義非道の奸物共日頃より忍ばれぬ賄賂を以て大役員以賄賂を以て政事を賈

り富豪をかばひ貧者を壓へ此困窮を見殺しに禁裡までないがしるとは道も

情も知らぬよな天も恐れぬ町人共運よきまゝに増長なし坐ながら奢に飽く

ばかりか奸物共と馴れ合ふて不義の富貴を積み重ね飢饉に耳を蔽ふとは罪

人ぢや罪人ぢや此罪人を捨置かば四海は狐狼の巢とならん最早堪忍相成ら

ぬ我せんすべをよつく見よ。

格之 して父上には？

中寄 金銀こそ善へされ金銀にて計られぬ藏書悉皆賣拂ひ貧しき者に施さん本屋

呼べ本屋呼べ。(棚の寄物を投出す)

第四段

其一 六甲山

山の頂一面岩石上少しく平坦なり。一方に石の小祠あり。下手に上り口あり。向山々見ゆ。曇天大風。

中齋岩を踏て立つ。

中齋二十二年の其昔血氣盛の若者と茲に競ふて登りしが思ひ出せば彼の時は空に微塵の雲もなく胸に微塵の思無し吹き來る風もいと清く四方の山々穩に海さへ鏡に似たりしが今は天も地も暗く心も暗き秋の日に此大風は天の血氣かそも浩然の氣なるか太虚の中にも怒あり剛毅は天の大徳なり靜なるのみにては虚無となる時あつて動けばこそ天の威徳行はるれあな心地好の風やな天のいづくに起りけん胸にも起る大風は此儘に止まれんや止むるは何者ぢや何者ぢや何者ぢや

(木の葉谷より吹上る)

散るわ散るわ秋の葉の行衛は谷か海原か脆きは民にさも似たり石に根からむ悪草を拂はんとせば先づ散らんこれが爲に止まれんや拂はずは尙枯れん

再び春に逢はざるべし散らせ散らせ皆散らせ。

(風の音)

孔子逝きて二千年經書は今に傳はるも斯道尙も行はれず天下は長く春秋の世をくりかへすもどかしき強き者は樂みて弱き者は苦の果はいつと望まれん此苦を苦めば彼樂も樂しからず弱なり害なり病なり天下の病は吾病心の病を治むるに此身を裂くを厭はんや正義の太刀に差別なし何惜む何憾む何恐る落ちよ落ちよ天の風心の風も吹き起り三百年の夢破り六十州を驚かせ積り積りて解けざりし正義を茲に伸さにやならぬ。

(大風の音)

矩之丞登り來る。

矩之先生先生

中齋宇津木か。

矩之餘りの風に木陰に入り暫く待つて居りましたが止む氣色はござりませぬ。

中齋いかたやすく止むべきか。

矩之それでは興もござりませぬ早う下山致しませう。

中齋止まねばこそ興も多いわ。

矩之そりやまた何故。

中齊 あれ見よ浪華は蜂の巢か蟻の穴より小さき此風一たび落しなば前の海にも散り行かん。

矩之 しかしこれにて野は荒され、一沙不作てござりませう。

中齊 イヤなに宇津木御身は多き門人の中にもわけて頼もしく股肱の思をなし居れば、けふの登山も唯一人御身のみ伴ふたり。

矩之 拙者も遠く御名を慕ひ、君父の暇乞受けて従ひ學ぶ此年頃常の師とは思ひませぬ。

中齊 さては御身に聞く事あり。

矩之 拙者も密に伺ひたし。

中齊 なに御身も聞きたいとは？

矩之 先づ先生より聞かせ下され。

中齊 然らば我より云ひ出さん。此山は攝津にて第一の峻山なり。茲に籠らば楠の干早とは如何であらう。

矩之 要害は劣りませぬが、勝負は兵にござりませう。

中齊 楠とて數千人敵は六十餘州の武士。

矩之 しかし戴く大君あり。

中齊 茲にも民を従へなば、

矩之 民とは町人百姓ならば何の力になりませうや。

中齊 力も無く光も無く何のすべも知らずとも、其爲に起りなば喜はいかばかり。

矩之 しかしかの楠もかしこの川に埋れたり。

中齊 最期は山にも限らぬか。

矩之 同じ不義にてありながら北條敗れ足利成る。天意如何でござりまする。

中齊 天に問へども天答へず地に質せば亂れたり。人こそ今に正すべけれ。筆か劔か幾度も敗れ取れて倒るとも、遂に正義の世となさん。

矩之 しかし今は太平の君父に忠孝盡すより外に務はござりませぬ。

中齊 忠孝の外に仁義あり、君父と共に百姓あり。

矩之 されど祿を食むからは、

中齊 其祿は誰が出す？民と國主といづれを以て御身は重しとなし居るな。

矩之 民の爲に君重く、君の爲に民安し。君に盡すが士の本分。

中齊 それは常の時の事。民苦て嘆く時は、君を措て救はんや。

矩之 君の手を借り救ひ申す

中齋 君若し心無き時は？

矩之 及ぶだけ我手にて、

中齋 君を忘れて救ふのか。

矩之 忘れは致さぬ君父の大恩、

中齋 すりやどこまでも？

矩之 忠孝こそ徳の本道も教も皆孝とは先生の日頃のお諭、

中齋 親に盡すは庶人の孝君に盡すは士の孝なり天下に盡すぞ孝の孝

矩之 すりや家を亡ぼしても？

中齋 オ、

矩之 君父の恩を差置ても？

中齋 オ、

矩之 フム——(考ふ)

中齋 あれく遠く練り行くは、いつくの國主の行列ぢや (二人立つ)

其二 同 横側

遠く海兵庫の港、淡川西國街道見ゆ松の並木の間に大名の行列過ぐ、

矩之 あれ楠の墓前にて籠をとめて皆禮拜、

中齋 身は敗れても後の世の人を動かす真心は、

矩之 忠か孝か仁か義か、

中齋 人の命はこゝろぢやなあ、

格之 助鞭を携へ登り来る、

(風の音)

格之 父上父上、

中齋 オ格之助何として參つたな、

お歸りまで待つて居られず馬に鞭うちまゐりしは今朝奉行所より俄の呼出

し取りあへず出頭致せば大和殿には氣色悪しく此程の施行の事退隱の身を

顧みず上を侮る致方急度叱ると云渡され、

矩之 なに施行もお叱りとな、 (空愈々暗くなる)

格之 重々無念でござりまする、

中野(なご) 刀(やいば)を抜(ひ)て岩(いし)を打(う)つ火(ひ)出(い)づツム火(ひ)か(電光(でんくわ)天(てん)にも火(ひ)あり地(ち)にも火(ひ)あり今(いま)に四(し)海(かい)を照(て)して見(み)せうぞ。

第五段

其一 大壘邸 一間

小座敷(こざしき)左(ひだり)右(みぎ)庭(にわ)上(かみ)手(て)奥(おく)庭(にわ)へ通(と)ふ切(き)戸(と)あり下(した)手(て)塀(べい)裏(うら)へ出(い)る口(くち)あり夕暮(ゆふぐ)。

矩(かね)之(の)丞(じやう)手紙(てがみ)を認(たづ)めて居(ゐ)る。

矩(かね)之(の)丞(じやう) あ思(おも)へばこれ(こ)も天(てん)命(めい)か良(よ)知(ち)の學(がく)の慕(ぼ)はし(く)此(こ)門(かど)に(い)りし(よ)り經(けい)書(しよ)の講(かう)義(ぎ)の
み(な)ら(ず)熱(あつ)き(な)さ(け)の身(み)に染(し)み(て)師(し)弟(てい)の契(けい)約(やく)な(し)た(る)が思(おも)ひ(も)よ(ら)ぬ此(こ)陰(いん)
謀(ぼう)い(か)に(し)て(も)從(したが)は(れ)ず(さ)れ(ば)と(て)見(み)捨(す)て(は)弟(てい)子(し)の道(みち)も亦(また)立(た)た(ず)君(きみ)父(ふ)と
師(し)と(に)挾(くわ)ま(れ)て(行)く(に)行(か)れ(ず)止(と)ま(ら)れ(ず)か(ゝ)る折(せ)に來(き)合(あ)せ(し)は是(こ)非(ひ)も(な)
き我(われ)薄(うす)命(めい)所(しよ)詮(せん)一(ひと)命(めい)投(な)げ(出)し諫(かん)言(げん)な(す)よ(り)外(ほか)は(な)し(か)く(と)は夢(ゆめ)に(も)知(し)り(給)は
ず故(こ)郷(きやう)に(て)は(け)ふ翌(あ)と(指(さ)し)折(せ)り(て)待(まち)給(たま)は(ん)百(ひゃく)里(り)二(に)百(ひゃく)里(り)海(うみ)山(やま)の遠(とほ)き西(にし)に(は)事(こと)
無(な)く(て)唯(ただ)二(に)十(じゆ)里(り)の此(こ)地(ち)に(て)命(いのち)終(は)ると聞(き)給(たま)は(い)か(に)く(や)し(く)おぼ(さ)れ(ん)
君(きみ)の御(ご)恩(おん)に酬(むか)い(ぬ)も心(こゝろ)に(か)ゝ(る)我(われ)最(さい)期(き)せ(め)て此(こ)書(しよ)を贈(くわ)り(な)ば我(われ)苦(くる)し(さ)も推(お)し
察(さつ)な(し)浪(なみ)華(か)に(煙(けむ)上(あ)る時(とき)彦(ひこ)根(ね)に回(ま)向(むか)し給(たま)は(ん)土(つち)産(さん)も形(かたち)見(み)も一(ひと)つ(ぢ)や(な)あ。
若(わか)無(な)友(とも)藏(ざう)出(い)づ。

友藏 若旦那御油断はなりませぬ。

矩之 オ友藏今呼ばうと思ふた所ぢや。

友藏 早くも支度なされませ片時も猶豫は出来ませぬ。

矩之 其方こそ猶豫せずこれを持つて抜けて出よ(手紙を渡す)

友藏 そりや御存じてござりまするか。

矩之 知れぬ様心をつけい。

友藏 そしてまたあなた様は?

矩之 某は去りはせぬ。

友藏 あの御加擔なされますか。

矩之 加擔もせぬ逃れもせぬ。

友藏 それでは若しや身の上は、

矩之 かゝはるは元よりぢや。

友藏 エイ。

矩之 仔細はこれに認めれば急いでき根に立歸り君と父とに傳へてくれ

友藏 どうして此儘參られませう現在危うい邸の体もしもの事がござりましたら

何と申譯致しませう。

矩之 いや、其方が居ればとて何の甲斐があるものぞそれよりは其書置き届けくれ
ねば我心知られず終るてあらう。

友藏 それぢやと申して――

矩之 エイ忠義は一つぢや。

友藏 ハッ、

矩之 早行けく。

友藏 若旦那(顔を見上げる)

矩之 オ、

友藏 づいぶん御無事で――

矩之 いやこれが最後の別れぢやわい。

友藏 ハア――(泣俯す人音矩之丞目くばせして促がす友藏涙を揮うて入る)

ゆう 上手の切戸より出づ。

ゆう 宇津木様。

矩之 これは奥様何御用でござりまする。

ゆう ちと折入つても頼みが――

矩之 なに頼みとあつしやるは、

ゆう 此程よりの邸の様子定めて御存じてござりませう。

矩之 されば日頃と事變り大筒小筒槍長刀不思議なる稽古なされます。

ゆう してあなた御思案は――

矩之 お尋ねまでもなくこれより直様先生に――

ゆう 御同意でござりまするか。

矩之 いや御諒め申す所存でござる。

ゆう 私も諒は分らねど見す／＼危き此企打明けもなさらぬ故獨り心配するばかり愈々迫る日限に夜の間も中々合ひませぬ。

矩之 すりやあなたも不承知とな。

ゆう それ故あなたにお尋ね申しどうぞして止め様と御相談にまゐりました。

矩之 所詮外に思案はござらぬ唯眞心を打明けて及ばぬ時は此一命。

ゆう 私も少しも惜みませぬがどう云はふやら理は知らず、

矩之 それは拙者が申すてござらう情を以てあといめあれ。

ゆう いえ／＼情には曲げぬ氣質。

矩之 いや此度の企も情より起ると覺えたれば情もて行かば好きかも知れず。

ゆう そんならこれより二人して、

矩之 聞かれぬまでもお諒め申し、

ゆう 首尾よう行かば何よりか、

矩之 行かねば先へ血を流す、

ゆう 覺悟きめては涙さへ――

矩之 見せぬが武士の

二人 習ぢやなあ。

其二 學堂

正面に揭示す、

以天地萬物爲一體此是孔孟學術

使天下萬物各得其所此是堯舜事功

中央に中齋左右に格之助濟之助儀左衛門助次郎正一郎渡邊良左衛門近藤

梶五郎梅田源右衛門宮脇志摩白井孝右衛門橋本忠兵衛列坐前に黄色の袋
に入れたる散らし文を置き後の壁には槍長刀火矢など立てかけ庭に大筒
小筒を備ふ下手に廊下あり向屏を越えて権現宮の屋根見ゆ。

中書 經書の講と事かはり經書の心行はんと此學堂を其儘に帷幕となすも時の變
格之 文成公も賊を討ち時に獨斷なされしも良知を致す至當のはからひ。
濟之 劍を筆と打揮ひ著はし給ふ先生の書後に従ふ我々は。

真左 數ならねども磨きたる心現はす此兩腕。
真左 小賊囚徒にあらずして民をしひたぐ奸人原。
梶五 天を侮る奸商の家倉開きまきちらす。

正一 こがねしろがね血沙の花。
源右 火焰の責は天の法。
志摩 神の怒を現はして。

孝右 民の恨を今茲に。
忠右 一時に晴すこゝちよさ。
助次 しかし用意は整ひましたか。

儀左 大筒小筒三十挺火矢二百本槍長刀旗は今日持參の筈。

忠摩 近在への散らし文には太神宮のお札をそへ天より降りたる跡になし
孝右 火の手上らば小前の者里數いとはずかけつけて金銀米穀分ち取り。

忠右 村々にては第一に年貢にかゝはる肥餘類引破り燒棄てさし。
真左 殊に穢多へもそれとなく申付けし事もござれば命惜まざ働くべし。

助次 徒黨の人数は略何程？
格之 與力同心十二人。

正一 浪人神官百姓等重なる者は二十人。
忠兵 人足小者は集むる最中。

助次 して事起す其期日は？

中書 期日は既に決定せり月の終に東西の町奉行が屋敷巡見向の家に休息なすこ
そ何よりの好き沙なれこれを狙ふて一撃なし川を渡りて大米屋其他の富家
に大筒打込み行かるゝまで進み行かん。

助次 してお城へは？
中書 城を乗取り何かせん目ざすは憎き奴原のみ印の旗も天照す我大神と湯武王。

救民の大文字、吾絶筆には好い心地ぢや。

助次 拙者も用意致すてござらう。いづれも御免。(入る)

中書 イヤ、恠しき平山の今の素振、誰ぞ追ひかけ問糺し仕義によつては打つて棄て

濟之 拙者追ひかけまゐるてござらう御免。

(入る)

備左 旗は遅うござりまするな。

五郎 唯今持參致します。

中書 オ、五郎兵衛待兼ねた。

五郎 誠に遅うなりました。何しろ人手にかけられず、人目を忍ぶ染物故やうく唯今出来ました。まゐ御覽下さりませ。(旗を示す)

中書 (開き見て) よしくこれにて十分なり。其方は何氣無く、いつもの通り家業なし。當邸へはまた參るな。

五郎 これは仰せとも覺えませぬ。私の命は大川の水に投げて無い所今の命は皆お蔭何がな御恩返しをと思ふ。矢先おあつらへ物を知らぬ私でも荒方それとは

お察し申し、勿体ないやら悲しいやら涙で染めた此の旗、武藝こそござりませぬ。せめてはこれをさしかざし、真先に進みまするが、万分之一のお禮でござります。

中書 すりや此度の企を?

五郎 此五郎兵衛の命は、福物のつまらぬものでも何になと、お使ひなされて下りませ。

中書 フム——イヤそれなれば頼みがある。

五郎 なに頼みとおつしやりますは?

中書 此身はいかになればとて、固より心きめたれど、唯氣がかりは我著述、これも定めて焼きすてられん、いや残すといふも私、既く所さへ正しくば、人の心に消えはせじ。それよりは妻のゆう、知らぬ事とて免れぬ罪科にさぞや驚かん。何とぞ力をそへてくれ、殊にそちの娘みね、只ならぬ身と兼て聞く。そも我先は今川義元以來續きし此家を、今滅すは何とやら孝道に欠くる次第、名は兎も角も血筋のみ、せめて残さば満足なり、とはいへ、それと云はれぬ仕義、ア仕合せか不仕合せか、そちも因果ぢや頼んだぞよ。

五郎 分りました。分りました。ござります、御安心なされませ。急度私がお血筋を、いや

私の血筋ぢや立てねばなりません。

中齋 過分ぢや五郎兵衛體をいふぞ。

五郎 何の御挨拶に及びませう。

中齋 それ染物代。(巻物を渡す)

五郎 こりや系圖ではない染物代難有うござります。確に受取りましてござります。

中齋 好い合點早行け。

五郎 そんなら先生。

中齋 五郎兵衛ア不思議の縁であつたなあ。

五郎 そしてまた若旦那、あなたは別に御注文は？

中齋 今更何もいふ事は——

五郎 いやそれも吞込みました。そんなら皆様どうぞ首尾よう、いやお天氣にしたい

ものでござります。

(入る)

儀左 あ學ばずして義理を知る、けなげな男でござりまするな。

濟之 助刀を抜きたるまゝ走つて出づ。

濟之 一大事でござりまする。

中齋 さては彼奴裏切ぢやな。

濟之 お察しの如く彼平山、卑怯にも奉行へ訴人追ひかけしが及ばずして却つて我

を捕へんと圖むを拂ふて参りました。

中齋 然らば猶豫なり難し、これより直に打立たん用意。

一同 ハア——

矩之 あいや暫く暫くお待ちなされませい。

矩之 忝出づ。

中齋 宇津木には何故に、

矩之 お止め申す無謀の企

一同 何と。

矩之 先程格之助殿よりお話あり、此程よりの跡たらく、大方それと推察なし、御諫言
をと思ひしが、斯く急にとは知らざりしに、今となつて後れしが、未だ全く遅く
もあらず、云はねばならぬは何よりも先生の御身第一。

中齋 そりやまた何故。

矩之 そも先生は藤樹以來世に傳らず陽明の學を掲ぐる唯一人重き御身を一旦の

怒に捨てんとせらるゝは餘りに惜うはござりませぬかしかも甲斐ある事共
か儘に俗吏町人共討て家財を散らせばとて何程の事がござらうやまして罪
無き者共を類焼なして何が義舉彼等の暴は憎むべきも此企も亦暴なり暴舉
の譏りに名を汚し御一族より一味まで跡を絶つとは何事ぞ何とぞ利害を考
へ給ひ今よりしても此企お止まり下さりませ。

中書 御身は私の利害を考へ未だ天の大理を知らずいかにも門邊大米屋彼等は斗
筭の小人なりされど古今未來まで稍もすれば上に立ち世にはびこるは彼等
の類なり天道は餘りに大きく顔面に賞罰せず孔孟いかに教ゆるも盜跖長
富むからは邪慝改むる時は無く貧者長く苦むべし我今彼を打挫き此を救ふ
は義を正し天道を行ふなり万巻の經典も一擧の炎に及ばんや一時の害は云
ふに足らず義理を解せぬ奴原は恐れしむるに若く事無し御身も一臂を貸し
てよからう。

矩之 いゝやそれは僻事ならん始皇の暴は唯一時暴舉に正義立つべくは孔子も饑
えはなされまじ。
中書 始皇の暴は悪行なり我企は善の爲

矩之 心いかに善にもせよ行悪となる時は心も共に曇るべし。

中書 然らば湯武は悪人か伯夷叔齊清くとも爲す事無くして救はれず。

矩之 湯武は勝つへき目算あり先生は見すく破滅。

中書 成敗は云ふに足らず天道を行ふに一時の勝を計らんや。

矩之 いや世俗の見るは成敗なり成りてこそ恐れもせめ敗れては笑ひ草――

中書 笑はい笑へ譏らば譏れ天の心は此手にあり觸るゝ者は天罰ぞ向ふ者は天の
罪人缺けし世界を今茲に猛火に投げて録直さん恐れずは殺すべし遁れても
通さんや不義不正の徒はまた一日も死しはせじ先つ我邸打碎き權現宮に一
發せよ寺院とて容赦すな彼等も不義の一なり大家と見れば打込めよこれこ
そ不正の土くれぢや不當に積みし金銀取上げ不當に苦む貧者に分たん今よ
り我は天の奉行ぢや。

矩之 あ願へされぬ御決心是非もなき義でござる。しかし拙者は君あり父あり忠孝
には替へられずさればとて師弟の情いかで見捨て申すべき君父の爲にお味
方致さず師友の爲に命惜まずいざ先つ拙者をお討ちなされ。
中書 オ、命貰ふたそれ格之助。

格之ハッ

(槍を取つて立上る。矩之丞胸を開て待つ。格之助突き兼ねて伏す。正一郎進て其槍を取る。突く。矩之丞倒る。)

中書 それ大筒

人足 ハア

(大筒を引出す)

ゆう 駆けて出づ。

ゆう 邸をお碎き遊ばすなら、此身をどうぞ其下へ。(自害す)

一同 ヤ、これは?

ゆう 跡へ残つて嘆かうより、お先へまゐる。一つの譯は今討たれた宇津木殿菩提の爲にもなりませう。

中書 出かしたくこれにて心残りはない。

ゆう 我つまゝならは。

中書 オ、

(ゆう死す。)

齊之いざ〜出陣

一同

致しませうか。

中書 打て!

一同 ハッ。

(一同立つ。正一郎權現宮に向て一發屋根碎ける。)
中書(槍を取て)家康も目を醒ましたてあらうわい。

其三 大米屋店

上手に倉あり下手に入口あり正面奥深く座敷見ゆ。一方の壁に諸國來狀注文帳多くかけ其下帳場小さき机を置く。

金之助銀兵衛向ひ坐す。

銀兵 イヤもうし若旦那何を考へておいてなされます。

金之 何をとほこれ銀兵衛お前は中々忠義なものぢやな。

銀兵 そりやまたなぜでござります。

金之 なぜにとほ分らぬか。矢つ張これは阿蘭陀か鵜飼の方が頼みになる。

銀兵 これはまたお情無い。新聞風情と私と一口におつしやるは餘りてはござりませぬか。

金之 これでも私が頼りにして何事も相談するのに、一つもやつてくれぬぢやないか。

銀兵 あなたの事で私がせぬ事はござりませぬ南や北の軍用金伊勢や京の遠攻にも、大旦那へ内々で、どん／＼御用達致しまするのに、兵糧方は損な役、手柄が一目にかゝりませぬが。

金之 そんな事は知つて居るわい。

銀兵 そんなら何でござります—ア分つた、まだあの敵にお心がござりますな、これはきつい御執心。

金之 人もあらうに大搦の内に奉公して居た故忌々しうてならなんだが暇を取つて出たからは、何とか仕様がな事か。

銀兵 またあの親父が片意地者容易に落城致しませぬ。

金之 それ故そなたを頼むのぢや。

銀兵 こりや大分むつかしうござりますな。

金之 オそれ／＼天満にある借家一面私の代になつたら急度お前にやる程に。

銀兵 エ、そりや本間でござりますか、イヤそれなれば兩肌脱て、大働さに働させう。

(立上る)

(鐵砲の音)

金之 ヤあの音は?

手代 走つて出づ。

手代 大騒動でござります／＼ (内へかけ込む)

金之 なに騒動、おみねをどこぞへ取られたのか。

手代 そこ所ぢやござりませぬ、あの音が聞えませぬか。

金之 さあ今聞て驚く所。

銀兵 よもや天満ではあるまいな。

手代 天満から始まつて大阪中／＼

金之 何ぢや大阪中?

手代 あの火を御覽なされませ。

金之 なに火?

銀兵 (門へ出て)ほんにこりやえらい火ぢや、いやどうやら借家の方らしいぞ。

手代 お内の借家は無論の事、火元は與力の大鹽から。

銀兵 エイ。

金之 今時分何の鹿相？

手代 鹿相所か我と我屋敷に火をかけたのでござります。

金之 そりやまた何て何の譯？

手代 譯は何やら知りませんが権現様へも鐵砲打ち天神様から寺々から大家と見

たら打込みます。

二人 エイ

丁稚 走つて出づ。

丁稚 来ましたくくく

金之 来たとはどこへ何者が？

丁稚 大鹽の軍勢が越へやつて来ましたわいなあ。

三人 エイ

銀兵 お取方は何て出ぬ。

丁稚 お取方は天満橋で待ちかまへて居られます。

金之 待つて居るとは手ぬるい話何て川を渡らしたのぢや

丁稚 何であらうが追々と人数は殖えて何百人火矢をばん／＼放しますもの、かな
ふものぢやござりませぬ。

金右衛門 奥より出づ。

金右 何ぢや越へやつて来るとか。

金之 こりや何と致しませう。

金右 何といふて仕様がな、大事のものを倉へ入れ、持てるだけ持つて出い。

銀兵 へい／＼それ皆片付けたく。

丁稚 ても體がふるひます。

銀兵 弱い事をいふないやい。

丁稚 あなたもふるふておいてなさる。

銀兵 それは風を引いた故。

金右 エイかれこれ云はずと早うせい、私は大事の書類と金子を。 (奥へ入る)

(鐵砲の音近づく)

金之 ヤアそこへ来たと見える、こりやかうしては居られぬわい。 (門へ出る)

向より救民と大書したる旗を先に立て、大筒を人足に引かし、格之助正一

郎儀左衛門源右衛門小筒を持ち次て天照皇太神としたる旗大筒——中
齋銀形の兜頭巾腹巻に黒羽織野袴手槍を持ち——孝右衛門忠兵衛志摩
梶五郎良左衛門——桐の紋つきたる旗大筒濟之助其外大勢具足櫃葛籠
を擔ふて——出づ。

金之ヤこれは、(逃込む)

銀兵 來ましたな、(裏へ逃入る)

金之 これ待つてくれ、

格之 此家こそ大米屋、

中齋 積みし金銀第一なるべし倉あけてまさちららせ、

一同 ハア——

(正一郎儀左衛門内へ入る、金右衛門手箱をかへて奥より出づ)

正一 (捕へて)こりや汝は何者ぢや、

金右 ヘイ召使でござります、

儀左 然らば倉へ案内致せ、

金右 倉はあれ、あれでござります、

儀左 わればかりではあるまい外にも多くあらうがな、

金右 外のはつまらぬ物入でござります、

正一 然らばこれより、(倉に入る、金右衛門裏へ逃げ入る)

正一 (出で來り)此倉はつまらぬ物入彼奴いつはりを申したな、

中齋 (内に入り)奥の方をさがして見よ、

正一 ハッ、

(數人奥に入る直に金箱篋筒の引出し掛物箱道具箱など持て出づ、

中齋 それ往來へまさちららせ、

一同 ハッ (皆詩く)

中齋 貧しき者は取りに來よ苦む者程多く取れ今まで持ちしは不義の徒ぢや今こ

そ救へ世の實猶豫せば火をかけるぞ、

(誰も來らず)

ニイ何を恐れる早く來よ恐るゝ所少しも無し答むる者は討取らん元を正せ
ば貧者の血汐盗むに非ず戻すのぢや、

(誰も來らず)

ニイ云甲斐なき者共かな取れと云へばなせ取らぬ我聲が聞えぬか我志が分
らぬか灰とならばこればかりか我志も無となるわい。

(自ら箱を砕く金銀財寶まさちらす遂に誰も来らず)

大和守討手をつれて出づ。

中書ヤア大和守参つたな。

大和謀叛人はいづくにある。

中書謀叛人とは何事ぢや汝等こそ正義の叛人今こそ天罰加へるのぢや。

大和それ者共。

討手ハア。(戦ふ)

其四 川端

正面町家いづれも道具取りちらして遁れ出でたる體下手四辻向に火見ゆ。

前川小舟一艘緊てあり。

阿蘭陀小兒を負ふて走つて出づ此方より鷗鷁走つて出づ突當る。

阿蘭ヤ鷗鷁か。

阿蘭オ阿蘭陀どうぢやお前も焼け出されか。

阿蘭焼けたともく、何もかも丸焼けぢや残つたものは此奴ばかりなさけない目
に逢ふたわい。

阿蘭そしてこれからどこへ行くのぢや。

阿蘭去年別れた女房の所へ逃げて行くより仕様がな。

阿蘭わしは獨身の一物無し少しは氣樂な様なものゝ行き所がないに困つた。

阿蘭そんなら私と一所に來い。

阿蘭どうぞ連れて行つてくれそして内はどこにある。

阿蘭谷町の一丁目ぢやが。

阿蘭そんならこつちへ行かにならぬ。

阿蘭何をいふこつちが東ぢや。

阿蘭そんな事があるものか今淡路町から逃げて來て茲が確に西横堀ぢや。

阿蘭嘘をいへ東ぢや。

貧民老たる母親を扶けて走り出づ。

阿蘭もう一寸伺ひますこゝは一體どこでござります。

貧民 どこぢやとは旅の方か。

阿蘭 いえ北の新地の者でござります。

貧民 粹な所に似合ひませぬな東横堀の平野町でござるがな

阿蘭 それでは矢つ張東堀か、そんなら向へ行かにならぬ。

貧民 あなた方は行き所がござりますな私等は當も無し内は焼けて着のみ着のみ

母親 今夜は馬場の松陰で明さうと思ひますが、翌はどうしやうやら、
貧民 お銭は元より何も無し泣き出したうござります。

阿蘭 イヤ御尤でござります私も裸で飛出したが、こんな時は皆泣寄り喧嘩はした
が女房の――

阿蘭 ヤ東へも火が移つた。

阿蘭 こりや向へも焼けて来る。ほんに泣きたう

二人 なつたなあ。

金之助 走つて出づ。

阿蘭 オ、若旦那。

金之助 誰ぢや〜。

阿蘭 私共でござります。

金之助 好い所ぢやつれて行つてくれ〜。

阿蘭 どこへも供致しませう。

金之助 どこへも好い早う〜。

阿蘭 私等も迷ふて居りますどうぞお内の御親類か――

金之助 さうぢや南の下屋敷へ逃げて行かう。

阿蘭 そんなら今度はこつちの方。

金之助 さわ一所に来てくれ〜。 (三人走つて入る)

貧民 金持は得なもの、こんな時も難義はせぬ。

母親 何かにつけて困るのは貧乏人

二人 ばかりぢやなあ。 (しほ〜行きかける)

次郎 七一方の家より出づ。

次郎 あこれ〜これを持って行くが好い。 (金を與ふ)

貧民 こりや五兩どうしてこれを私に?

次郎 それで當分困りやしません。

母親 でも戴く譯がござりませぬ。

次郎 いや、やらうと思ふて此企遣慮せず取るがよい。

貧民 それでは若しや徒黨の内?

次郎 徒黨でも無く無いでも無い何てあらうと取れといふのに。

貧民 どうして〜貰へませう徒黨なら跡でたゝり、どんなお咎めあろも知れぬ。

次郎 いや徒黨では無いといふのに。

母親 徒黨でなくば何人ぢや失禮ながら物持とは、どうも見えぬ其風體。

次郎 盗人——でもない貧乏人。

貧民 貧乏人がどうしてお金を?

次郎 貧乏人故貧乏人に、恵むのは相互。

母親 それではあなたがお困りなさらう。

次郎 私はこちらとも困りはせぬ、無くなつたらまた取つて——

二人 エ?

次郎 いやまたくれる人がある。

貧民 何の人がくれませう今の時節に此騒動。

次郎 騒動故やるのぢやない。

貧民 騒動故貰へませぬ。

次郎 悪堅い男ぢやなあ。

貧民 金はほしいが金よりも法度がこわう

二郎 ござるわいなあ。(二人入る)

次郎 エイ臆病な奴等ぢやない——しかし雖もあの通り、かういふ時はこわいが第

一折角旦那の仲間入りしたうても許されまいとよそながらのお味方に憎く

さげな家々へ火をつけてまはつたが心地好う焼けるばかり金銀財寶取次が

うにも矢つ張取るのは悪い奴ぢやなあ。

(人の音次郎七隠る。金右衛門手箱をかへて出づ。)

金右 いやひどい目に逢はしをつたし、かし家庫焼かれても僅の金で直に立つ焼い

ても焼けぬは田地畑諸方への貸附金、かういふ内も利が殖える殊にこれ

米の値が一倍上るに違いない、こりや却つて得ぢやない。

(次郎七出て、金右衛門の手箱を取らんとす。)

金右 ニイ何をするのぢや。

次郎 何をと其箱渡せ。

金右 猛々しい其言葉、騒ぎにつけこむ盗人め。

次郎 いつもなら盗人ぢやが、今晚は違ふのぢや。

金右 賊でなくば徒黨の片端、どちらにしても同じ曲者。

次郎 曲者とは己の事、其箱渡せ焼てやるのぢや。

金右 大事の書類渡さうか。

次郎 渡さや命も取つてやるぞ。

金右 何を小癪な。

(争ふ船頭走つて出づ。)

金右 もしも助け下されませ、追刺てござります。

船頭 なに追刺。

(分け入る、次郎七通れて後の明家に入る。)

船頭 たうく逃げて失せをつた。

金右 お蔭で命を拾ひました。

船頭 こんな時は物騒な、ちつとも早う歩いてなされ。

金右 して騒動は静まりましたか。

船頭 やうく今済みました。

金右 それでは頭の大鹽も、お討取りになりましたな。

船頭 いや討たれたのは浪人一人、あとは皆逃げました。

金右 なに逃げた——それはちと氣味が悪いな。

船頭 何しろ飛道具を使ふので、お奉行さへ御落馬なされ。

金右 なに御落馬——してお命は？

船頭 お命に別條はなかつたが、お討たれなされたと心得て、御家來來は一時逃足。

金右 いや頼みにならぬものぢやなあ。

船頭 何しろ太平續き故かすり取りは上手ぢやが、いくさと來ては皆素人主人も捨

て、走るのを返へせくとやつとの事、また討出して向のつはもの梅田とや

らを打つたので、たうく負けて散りました。

金右 それはまあ目出たい事しかしどこへ行たか分りませぬな。

船頭 目ざす敵を打滅した故、急度も一度やりませう。

金右 何の再び出来やうか、またやればとて同じ事ぢや。

中齋 妾を變へ、顔を包み、格之助掛物箱を持つて出づ、金右衛門見て隠る。

中齋 幸茲に舟がある、それ。

格之 船頭はお前か。

船頭 へい左様でございます。

格之 私等は焼け出されて来たのぢやが、一寸其舟へ乗せてくれ。

船頭 どちらまででございます。

格之 それは跡にて申す故、兎も角も乗せてくれ。

船頭 それでも先が分りませぬと——

中齋 (金を攫み出し) これで云分あるまいな。

船頭 ヤこりや二兩餘りの張込み様。

中齋 エイ増のあかぬ奴、かまはずに乗るが好い。

船頭 これまあお待ちなされませ、何やら怪しい此方衆は——

内山 彦次郎 捕手つれて走り来る、金右衛門出て、ささやく。

彦次 待て。

格之 助掛物箱より鐵砲を出して放つ、捕手一人倒る、船頭逃入る、金右衛門
伏す、彦次郎かいらうとする、次郎七出て、遮る。

次郎 旦那早う、茲かまはず。

中齋 オ、

舟に乗る彦次郎進まうとする、次郎七防ぐ、格之助船を使ふて入る。

第六段

其一 北新地 茶屋

新築したる坐敷欄の向に焼跡見ゆ上手床より御幣を立て三賓に餅を供ふ。金之助床の前に坐し、藝子舞子仲居鶺鴒阿蘭陀侍酒宴歌舞。

東西々々餘り馴騒ぎも智慧がござりませぬ故一つ狂歌をお聞き下されませ。平八の頭を取れば皆人の氣も安うなる米といふ文字。

とはどうでござります。

阿蘭 いやそりやいかん安くなる所かまた上つて諸式まで五割一倍貧乏人は猶困る。困らぬのは若旦那私がお耳に達しますするは、

大鹽のどつと出てはそつと引く、また寄するはと門邊騒動。

金之 ヌイまた寄せられてたまるものか。

藝一 此上焼けたら大阪一面野原になつてしまひます。

藝二 此間でも天満から船場上町百十二町焼拂ひ家數三千六百軒

舞一 寺が十四ヶ所に社が三ヶ所。

舞二 お邸から半屋から橋まで落ちて焼跡は廣い所て八百間

仲居 千間とはこわい事。

藝三 しかしお宅は直御普請定めて以前に幾層倍立派に出来ませう。

金之 出来るとも、焼けたを幸裏へ廣げ三階を立て、大阪中一目に見下すつも

りぢやて、それから庭は金閣寺の鏡湖池に銀河泉夕佳亭まで寫し取り、大書院

は五間床真綿入の畳を敷き廊下は總て鶺鴒り。

藝子 まあ結構な事てござんすなあ。

金之 いやまだ足らぬ所がある、私の代になつたなら京大阪の美人を撰り人間の花

壇作らうもの、それまでは茲を遊場大分前より綺麗になつたな。

阿蘭 かういふ商賣する内は時々焼ける方がよろしうござります。

仲居 エイさう焼けてたまるものかいな。

金之 いや焼けたらどん／＼建てるが好い目先が變つてよいなぐさみ。

舞子 それでは旦那にお願ひ申し茲の畳へ天鷲絨の縁がつけたうござんすなあ。

阿蘭 いや天鷲絨より木綿でも我等の内の勸進帳帯の中より取り出だし高らかに

こそ讀み上げられ。(帳面を出して開く)

それつらくもみれば、旦那様方のこがねの光は、火事の煙の外に隠れ、榮耀榮華の長き夢驚かすべき、藝もなし、茲に與力の隠居おはします、其名を大鹽平八郎と名づけたり、最愛の書物に別れ心狂ふて市中を焼く、我々口の干上らん事を悲み、阿蘭陀坊帳面旦那方を勸進す、一兩十兩奉加の方々は座敷にては無比の快樂、それで足らずば、美人天人蓮華の中まで詮索せん、奇妙頂禮敬つて白す。

阿蘭 いや染みたれた辨慶ぢやなし、しかし此富樫をさし置て、頼朝公へ直訴、ならぬ

阿蘭 いやまた情知らぬ、留守め、こりや義経より富樫之助己を打つてくれやうか。

(三味線振上げる)

阿蘭 ちよこごいな打つて見、義経の様に打たれて居ぬぞ。

阿蘭 何を。

(打てかゝる、真に争ふ)

金之 ハハハ、待て、こりや頼朝が仲裁ぢや、それ十兩二人して分けるが好い、二人これは難有う存じます。

阿蘭 此禮には富樫と辨慶。

阿蘭 二人が、くちて延年の――

金之 いや舞よりは美人天人蓮華の中をさがしてくれ。

阿蘭 オット合點丁度、此度天降つた、天人がござります、どれ呼てまゐりませう。

(入る)

金之 早速に間に合ふとは、天人も自由ぢやなあ。

阿蘭 それは羽衣に飛火をして、焼けた故てござります、これでは歸る氣づかひなし、いつまでもおなぐさみ。

金之 しかしどんな姿やら、天人の舞樂より、人間には人間の踊の方が見たいものぢやて。

阿蘭 阿蘭陀、おみね、藝子の姿にて出づ。

阿蘭 さあ、これは風早の三保の浦回をこゝ舟の――

金之 (金之助を見て) やああなたは、

阿蘭 オ、思ひがけない其姿は、

阿蘭 ヤこりや、お馴染でござりますか。

阿蘭 いつの間、御昇天、油断のならぬ若旦那。

金之 いや夢に見た天人に、茲て逢ふとはもつけの幸こりや何より出かしたく、
阿蘭 それではも一度勸進帳。

金之 ヨイまた讀まれて溜まるものか、それよりは佛か静ぢや先づ一つ舞ふて見せ

阿蘭 それおみねさん、お手並が

其外

見たいなく

みね あの私は

阿蘭 いや忠信が附て居る衆徒てはない、若旦那装束は其儘で芳野山、芳野山

歌

芳野山峰の白雪、蹈み分けて入りにし人の跡埋む、花は春にも似たれど
も袖に積りて肌寒き、風に氷るは誰露ぞ、我は泣かねど人や見ん涙を隠
す法樂の舞ふ間に落ち延び給はんと、思へばこれも防ぎ矢か、名さへ勝
手の神ならば守らせ給へ、君が爲浪路、渡ぎて山路まで添ふも離るも戀
ぞとは、我身ひとつの思かや、君の夢にも入るならば守りきびしき關越
えて東のはても追ひ行かん、心はあなた身は茲に舞ふか、走るかうつゝ

なき、みだれも振と見えにけり。

みね舞ふ。

一同 ようく。

金之 いや義經の果報者、私も頼朝を止めにして、義經に役替へぢや。

阿蘭 それでは茲を堀川御所前へ戻つて、静御前さあ、お側へ行たりく。

みね 私は茲が勝手でございます。

金之 ヨイぢらさずとこれおみね、まあ一つ飲み給へ。

みね 酒は滴もいやぢやわいな。

阿蘭 これは、どうしたもので、一寸でもお受けなされませ。

みね 何やら氣分が悪い故。

金之 其悪いのは誰故ぢや、浮かぬ顔は判官殿、矢つ張外にあるのぢやな。

みね エ?

金之 ちと笑ふても好いではないか。

みね こりア私の性分故、どうも仕様がござんせぬ。

金之 いや性分ではよもあるまい、大鹽に居る中は、大分陽氣であつたとやら。

みれ エイ。

金之せめて一つらてくれ。(盃を出す)

みれ ハーイ。(盃を酌する)

金之(飲て)いや此味は格別ぢや始めて甘い酒を飲だ。

阿蘭 これはあめづらしい若旦那が甘いとあつしやつたのは遂に聞た事がござりませぬ。

阿蘭 唐の艘か阿蘭陀の鯛を上げてもお氣に召さんと思ふて居たら只の酒が、金之甘いのも鯛の味是非共一つ受けてくれ。(盃をさす)

みれ 何をどうあつても私は――

阿蘭 まあさ真似てもお受けなされ。

みれ 真似てもいやでござんすわいなあ。

金之 何と。

阿蘭 いやまだ里にお馴れなされませぬ故、あゝ氣長う若旦那、金之いや里馴れぬこそ幸ぢや今の中に受け出さう。

みれ エイ。

金之 亭主呼べ。

みれ まあ〜待つて下さんせ私もよう思案の上父様とも相談して――

金之 思案も何も入るものか以前と違ひも賣物金さへ出しや云分無いぞれ早う亭主々々。

阿蘭 これは御性急でござりますな。

阿蘭 いや麻かぬ柳は茂らぬ中根から抜くが第一ぢやどれ呼てまゐりませう。

(みね立上る)

金之 こりやどこへ。

みれ どうも胸が痛い故。

金之 胸ではあるまい虫か男か。

みれ 虫も泣かずに居られぬわいなあ。

(入る)

金之 エイ氣色の悪い騒げ。

阿蘭 ヘイ〜皆さん。(歌ふ)

降れよ春雨焼野のきりす戀にこがれて居るわいな。(總踊)

其二 會所

正面板壁上手障子にて仕切り下手に入口あり外に辻行燈あり内山彦次郎
上手に坐し同心八人四ヶ者二人町年寄下手に控ゆ。

彦次 どうぢや、まだ手がへりは無いかな。

四一 東堀から舟に乗り、天満橋の下に一日隠れ、また四つ橋から上りまして、大和街
道を鯉が背峙越えたまでは知れましたが、

四二 山番を一太刀あひせ、それから先は行方知れず、何しる此筋の者でござります
故中々、ひつかしうござります。

四一 しかし以前私等をひどい目に逢はしました、意趣返しにと申合せ、骨を折つて
居ります。

四二 何でも跡へ引返し、此大阪の市中に隠れ笑ふて居るのでござりませう。

彦次 拙者も若しやと思ふた故、今美好屋を呼びにやつた。
年寄 もう参るでござりませう。

五人 組先に立ち五郎兵衛出づ。

五人 召連れましてござります。

彦次 美好屋五郎兵衛とは其方か。

五郎 へい、左様でござります。

彦次 其方大鹽平八郎へはいつ頃から出入致す。

五郎 へい、く、イヤ何も隠す事はござりませぬ、大鹽様へはつい近年も出入を致し
ます。

彦次 していかなる所から出入する事になつたな。

五郎 それは娘を御奉公に上げました所から折ふし、出入致します。

彦次 それでは今度の企を急度聞たてあらうな。

五郎 いやそれは少しも存じませぬ。

一同 こりや隠すと爲にならぬぞ。

五郎 何の隠し申しませう、また私の様な物も知らず力もない者に打明けて話の
ある筈がござりませうか。

彦次 然らばそれは知らぬにして、今親子を其方の内にかくまひ居らうがな。

五郎 何かくまふめつさうな尋ね者、夢にも覚えはござりませぬ。

年寄 これ五郎兵衛殿覚えがあるなら仕方がない有体に云はつしやれ。
組一 隠しても知れた日には、

組二 こなたは獄門、

組三 お内儀は遠島、

組四 私等までお咎受ける、

組五 こんな迷惑な事はない、

同一 殊に私等が睨むたら、蛇に巻かれた小鳥同様、

同一 飛ぶにも羽は動かぬぞ、

座次 きり／＼白状してしまへ、

(次郎七出づ門外より立聞する)

五郎 ハ、ハ、イヤ私こそ迷惑千万、いかに出入すればとて私風情を頼みに来る大
鹽でもござりますまい、又火元の此大阪殿しい中へ歸つて来る、そんな者もご
ざりませぬ、これは東か西國か唐天竺でござりませう、そこらをお探しなされ
ませ、

座次 こいつ中々しぶとい奴、拷問する覺悟せい、

五郎 拷問など獄門など御勝手になされませ、一旦死なば此地獄と思や何ともござ
らぬ、

座次 エイ其口を—— (立上る)

年寄 まあお待ちなされませ、何につけ片意地者一應ではまゐりますまい、これは私
共にお預け下され、また家内をお調べがよさうにござります、

座次 然らばけふは下げてやらう、急度町内へ預けたぞ、

五人 ヘイ／＼確におあづかり申しましてござります、

座次 (四ヶ者に其方共も今一度此あたりを探して見い、

日一 かしこまりましてござります、

日二 隅から隅まで嗅ぎまはり急度出す故あわてるな、

五郎 それは御苦勞でござります、

年寄 これ入らぬ事は云はぬものぢや、

(次郎七うなづき急いで入る)

其三 美好屋 店

正面徳間に奥へ入る口あり暖簾をかく前板間色壺三四上手に裏へ出る口あり下手に門口あり職人二人手を束ねて居る。

一 何と仁助親方も此頃は急にむつかしうなられたなあ。
二 さればぢやわい私の内も焼けた故泊めて貰はふと思ふたらさうはならぬとけんもほろい。

一 聞けばいつぞや大鹽に助られたといふ事ぢやがそれで心配してか知らん。
二 心配したら物も食へぬに此頃の飯の焚き様いつもより仰山な此米の高いのに一鉢ありや何であらう。

一 あぢな所へ目をつけるなよもや施行ぢやあるまいし家内とて同じ人数。
二 稻荷様でも移つて来たのか。
五郎兵衛歸り来る。

五郎 エイヤかましいい何を云ふ此時節にうかくと無駄口さいて隙潰すか。
一 ヘイ、いや遊では居りませぬ。
二 手は動かして居ります。
五郎 物を云へは手が鈍るそんな事で役に立つかい。

一 これは御免なされませ。

五郎 いやならぬ堪忍ならぬけふ限りことわつた。

二人 エイ。

五郎 これから直にいでてくれ。

一 これはえらいお腹立ち。

二 どうぞ御堪辨なされませ。

五郎 ならぬ、堪忍ならぬとつと、いんだくく。

一 これはさきつゝ火の手ぢやなあ。

女房つね出つ。

つれこれはいつにない腹の立て様まお堪忍してやらんせいなあ。

五郎 いやならぬ、どうあつてもいなさにやならぬ譯がある。

つれ 何譯とは？

五郎 さあ譯は役に立たぬ故ぢや。(目くばせする)

つれ 成程これはいなさにやならぬほんに氣の毒でござんすがまあ暫く蹲つて下

され其内世間が好うなつたらまた来て貰ひますわいなあ。

- 一 世間が悪うござります故も頼み申すのでござります。
- 二 もう無駄口はきくませぬ、どうぞ使ひ下さりませ。
- 五郎 エイいつこいならぬと云ふに。
- 一 ころや大衛ぢや。
- 二 かなはぬく

(二人走つて入る)

つれ 少しの事を種にして、皆を断はりなされたのは、奥の爲てござりますか。

五郎 さうぢや、始から断はらうと思ふたが却つて疑起さうかと待て居れば飯の焚き様かぎつめた様子故わざと怒つていなした、が、ころや油断は出来ぬわい。

つれ そして會所の様子はえ？

五郎 色々と尋ねられたが、知らぬく通して来た、もう茲も危ないわい、今夜の中にお落し申さう。

つれ して路用はござりますか。

五郎 路用は娘のあの身の代死でも買らぬと思ふたが、斯うつまつては是非が無い。しかも大事のお嵐を宿し、色香を業の遊び女に汚さぬ様とは無理の無理。

つれ そして若し間に合はず、今にも茲へ捕方が、

五郎 来たら覺悟は極めて居る、水を逃れた私ばかりか、世間の爲め今度の事御恩返しは居間の口大の字なりに往生ぢや。

みね 手拭にて顔を隠し走つて出づ。

みね (内に駈入り) と、さん達はして下さんせいなあ。

五郎 達はしてとはそりや誰に？

みね ヨイ氣の無い格之助様ぢやわいなあ。

五郎 格之助様はお立ちなされた。

みね なにお立ち、それはいつてござんすえ。

五郎 つい今先の事。

みね 嘘や嘘ぢや、此晝中何ても立ちなさんせう。

五郎 いや晝中ても大膽に、わざとお立ちなされたのぢや。

みね かいさん本間でござんすか。

つれ さあ本間やら嘘ぢやいら。

みね ころや嘘ぢやくく、ヨイと、さんも何ぢやいなあ、なぜ達はして下さんせぬ。

五郎 エイも立ちなされたと云ふに。

みれ そんなら奥をさがしますぞえ。

五郎 ヤイ何ぬかすあのれまで。

みれ それもいいていござんせうがな。

つれ もしこちらの人他人でない娘の事――

五郎 さ娘の事故尙ぢやわい。

みれ そりやまたなせてござんすえ？

五郎 これおみね、わりや唯の跡ぢやないぞ其お腹には大事のお胤いや大事の孫を

宿して居る。それを世に立てやうと思や、もう逢ふ事はならぬぞよ。

みれ でも現在あなたのお胤

五郎 さ、あなたの胤故胤にはせられぬ。茲をよう考へてな逢ひたうても、まう逢ふな。

みれ 一寸だけで好いわいなあ。

五郎 エイまだ云ふかい、そればかりでは無い、こちらの内に居ても悪い、早ういんてま

う来るな。

みれ エイ？

五郎 此五郎兵衛はな、壘の上で死ねばとて死骸は高い木の空へ上げられるに極ま

つた。

みれ エイ

五郎 したがそなたにまでかゝるまい、早う行け。

みれ いえ、私が行かれませぬ。

つれ 行かれぬとはそりやなせに？

みれ あの大米屋の金之助未だに心残るかして不圖座敷へ呼ばれたら、いやな事を

云ひかけて。

つれ エイ！

みれ 逃げて、逃げて、逃げて、根強う、親方に話して、身受をすると云ひますわいなあ。

つれ こりや困つた事ぢやなあ。

みれ 私はいなぬつもりでござんす。

五郎 あゝまた一つ詰つて来た。

みれ それ故一寸お目にかゝり、御相談がしたいわいなあ。

五郎 相談しても何の詮こりや、絶命ぢやよし、これから直に逃げて行け。

みね 逃げいとほりやどこへ？

五郎 どこへとて當はない。

つれ として路用はござんすか。

五郎 こつちの路用も足らぬ所娘にまでやられぬわい。

つれ まあどうしたら好からうなあ。

五郎 エイ乞食せい乞食してくれ。

みね 乞食するは厭ひませぬが、それでは早う見付けられましょ。

五郎 見付けられたら死ぬまでぢやいや、死なれぬ波多に死ぬな。そらばかりぢ

やない大事の幹、エイ取られるのかい、やるのかい、現在敵に渡すのかい。(泣く)

みね エイようござんす、私も覺悟さめました。逃げられる丈は逃げませう。つかまへ

られたらどうなりと必ず此身は汚しませぬ。よう云ふて下さりませ。そんなら

逢はずに行きますぞえ。父様母様、これが別れてござんすかいなあ。(すが

り附て泣く)

五郎 (涙を拂ふて) いや泣て居る所ぢやない、ちつとも早う技を出、其風では人目に

立つ前の着物を出してやれ。

つれ ハイ、それこれと着替へて行きや、常の衣服を出して着替へさす、必ず、

わづらやんな。

五郎 困りぬいても必ず死ぬな。

みね 何の死にましょが、若し死なら堪忍して――

五郎 エイ弱い事云ふないや。

みね そんなら活きて居ります。其代りどこぞでは、も一度逢はして下さんせいな

あ。

(門へ出る茶屋の若い者二人向より来る。)

若者 それ見つけた技ぢや。

みね もう追手が――

五郎 エイ。

(飛て出る。又内へ入つて戸を閉ぢ、柱に取付て目を閉づつね悶え
る。みね争ふ。遂に捕へられて振りかへりながら入る。)

つれ なせ手出しをなさらぬのぢや。

五郎 手出しをしたら私も巻さぞへ見すく、娘を取れたわい。

つれ、これが辛抱出来やうか。

五郎 (門をわける、次郎七飛込で奥へ行かうとする。)

次郎 一寸旦那に逢はして下され。

五郎 旦那とは誰の事私が茲の主人でござる。

次郎 いや大鹽の旦那の目には――

五郎 そんな人は内に無いどこぞ餘所をお尋ねなされ。

次郎 いや私に隠す事はない旦那もよう御存じの――

五郎 何であらうがござらぬもの、とつと外へ出たり――

次郎 いやそりやいかぬ、四ヶ者よりはまた一倍蛇の道知つた此輩盗人の次郎七ちやと取次で下されい。

五郎 盗人なら焼跡か新立の家をさがしなされ、こゝらを探しても金にはならぬ。

次郎 金は此方から出します、此方なら受けてもよからう、路用のたしにして下され。(金包を投出す)

つれやこれは。

次郎 それより早う旦那に逢うて――(行きかける)

五郎 (止めてどこへ――) 跡を襲へて探索しても、茲の内には誰も無い無駄をせずと

踏つた――

次郎 まだ疑うて隠すのか、それなら私は徒黨の一人ぢや。

五郎 盗人は徒黨に無い。

次郎 エイもうかれこれ云はずと逢はして下され。(推して通らうとする)

五郎 こりやもういつそ――(刀を抜いて斬り付ける)

次郎 エイ何をするのぢや。

(争ふ、次郎七一刀斬らる、五郎兵衛尙も斬りかける)

次郎 こりや待て待て待て待てくれ。

五郎 かうなつたら破れかぶれ何といふても殺してしまふ。

次郎 殺されるはかまはぬが其前に逢はしてくれ。

五郎 まだ抜かす其口を――(刀をふり上げる)

次郎 疑深い男ぢやなあ――そんなら此方を頼て置く、私は旦那に代りに来たのぢや。

五郎 何と。

次郎 所詮通れぬこなたの内、今晩にも取圍み踏込むに違いない、といふて早う落しても詮議殿しい六十餘州どこまで逃げて行かれるものか、それより此方は白状してわざと茲へ案内し、それを相圖に火をつけたら、誰が何やら黒くすぼり、烟の中に旦那を落し、私が代つて死だとして、よもやそれとは分るまい、これて一先づ落着さし、網をはづさす私の考へ。

五郎 そりやまた本氣で云はしやるのか。

次郎 かうなつて嘘をつかうか。

五郎 それでは矢つ張一味であつたか。

次郎 一味でもなく弟子でもないが旦那の心は呑込てよそながら一甲斐も無い盗人は矢つ張盗人、其盗人で果てやうよりせめて旦那の身代り人間らしい死様したら、罪の端も消えやうかと、命を置きに來た次郎七、いっそや塾へ閉込めて、教へてやらうと、おつしやつたが、お講釋は聞かいても、ちつとは譯が分つたつもり、これでもまだ曲つて居るか、跡でよく聞て下され、出かしたとおつしやつたら、それが何より回向てござる。

五郎 免して下され、次郎七殿、其心とは思ひもよらず、先生大事と斬りつけて——
次郎 重手負ふても負はいても、どうせ死に來た跡、そんな事は、どうても好い、それより早う旦那を落す。
五郎 さうぢや支度を致しませう、此方も一寸お逢ひなされ。
次郎 それでは案内して下され。
五郎 さあ確と私の肩へ——

彦次郎 同心大勢つれ入る。

彦次 御用ぢや。

五郎 (次郎七を掩ふて) こりや何となされます。

彦次 何と、は横道者、お尋ねの大鹽親子案の如くかくまひながら、先刻はよう援けたな、最早かなはぬ案内致せ。

五郎 また大鹽のお尋ねか知らぬ事はいつまでも——

彦次 まだ申すか、雇人より略々知れたわ、それ者共、

同心 ハア(奥へ行きかける)

五郎 (止めて) これまあお待ちなされませ、火打箱の様、な此内でも、私は主人、覺えのな

い事に陥みにぢられてはちと顔が立ちませぬ、まあゆつくりと私の云ふ事—
彦次 エイ隙入らば取逃さん、こやつから引く、れ。

同心 ハア。(かゝる)
五郎 イヤさう無法に出られては、お上とて恐れはせぬ、さあ通るなら通つて見さん
せ。(奥の口に大手を廣げて立つ)
彦次 それ。

(同心かゝる、五郎兵衛争ふ、つね次郎七を扶けて奥へ入らうとする、彦次郎押へる。)

其四 同離座敷

三方壁一方に小窓あり、前空地上手に樹木茂る、下手に木戸あり、店への通路あり、入口には戸障子を立てかけ、側に火鉢を置く。
中齋目を閉ぢて坐す、格之助侍す。

格之 父上、父上。

中齋 (目を開き) あ太虚の境を尋ねしに、何事ぢや呼戻された。

格之 何やら表に騒ぐ音、只ならず思ひまする故。

中齋 假令何か起らうとも、今更驚く事はないわい。

格之 でも一日でもお命を取りとめたいが、心一杯。

中齋 一味の者は戦場にて、或は討たれ自殺なし、捕はれて牢に死し、屍も市を引廻され、張付に逢ふもあり、主謀の我のみながらへても、心苦しき次第でないか。

格之 いえ、さうではござりませぬ、彼人達とて父上の御存生こそ願ふとも、何恨に思ひませうや。

中齋 よし恨む事なくとも、これより先をいかにせん、いつまで茲に居られもせじ、西も東も法の網天の網より細かくて、大なる程、扱けられず。

格之 それには僧と姿を變へ、くゞりくゞりて長崎より、異國の船に乗移り、露西亞米利堅へても參るてござらう。

中齋 さう行かされるは、行きもせん、しかし心が残らうぞ。

格之 そりやまた誰に?

中齋 此場に及て何憚る。

格之 ハッ (俯むく)

中齋 夫婦親子は情の根元其上にこそ道は立て思ふも良知の端ながら遠く去れば
これまでぢや。

格之 思ひ切つて居りましたに由無き事を仰せらるゝまかし茲にて相果てなば彼
等の嘆はいかばかりよしや再び逢はれずとも海のあなたに居るならば慰む
端ともなるてござらう。

中齋 はかなき事をたよりにする情は脆きものぢやなあ。

格之 志て父上の心は？

中齋 我にも心残りがある。

格之 そりやまた何に残りまする。

中齋 此世の民に残るわい。

格之 何とあつしやる。
中齋 ア測られぬは心ぢやなあ——思ひ出せば一度二度我心は三度まで變りしも
一昔先づ十五歳の春なりし始めて家の系圖を見て祖先は名ある武將より出
てしと知りし嬉しさよあはれ再び我家を興さんものと盟ひしが父母に別れ
て職を継ぎ、日毎に見るは府吏囚徒榮利の中に氣も傲り鞭うつものとの一間の

罪を知りしは二十五歳野心一たび變りしが世上の儒者の風に染み訓話の中
にかいみしを、三十八歳にして陽明の教に開く良知良能外に求むる念絶えて
洗心洞の主人となり、内より更に見渡せば、我爲ならぬ喜怒哀懼忍び得ずして
動きしが、今また見れば一嵐。

格之 まかし危急は尙止まず、此家に寄せて來る時は？

中齋 打たると思へば打たれなん、打たれぬ心は何やらん。

格之 すりやあ心はどこまでも？

中齋 濟だく濟み切つた。

格之 お身を烟となされても？

中齋 オ、
格之 家を断絶なされても？

格之 燒きし家家はまた立ちて前に異る事もなく、救ふ貧者は家も無く、一しほ飢に
苦しむとも？

中齋 エイ汝まで分らぬか。

格之ハツ

中齋 夢は一時ぢや理は不滅ぢや。

格之 ても天道はいづくやら。

中齋 ア此世の路も窮まつた前後左右に立隔つ壁に向つて事問へど云はず語らず
薄黒く曇るは天にさも似たり天道かくと見極めて行ふものを容れられず剛
毅に過ぐと云はれ云へ優柔にては益あらんやさては其儘措くべきか其知無
くば措かれなん太虚に歸せばいと尙我のみ善くて止まれんや若しくは我
學非なりしか天道と道と異なるか正義は人の心にて心の外に此世あり限ある
世は限無き心のみにて足るべきか心々に傳へんに遂に苦む事なきかまして
此儘知られずは烟ぢや霧ぢや毒霧ぢやなあ。(次郎七よろめき乍ら入り来る)

次郎 旦那——(言葉出ず手まねにて示す)

中齋 否今こそ晴々霧烟罪も我身も皆消して賊に洗う心の洞の洞といふ字も焼か

ねはならぬか。(捕手入来る)

格之 父上おさらば。

中齋 オ、

格之助火鉢に火薬を投入る火起る捕手透巡格之助自殺中齋喉を
突き其上に伏す捕手込入る一面烟

大鹽平八郎終

81
443

明治三十五年十二月二十日印刷
明治三十五年十二月廿五日發行

大鹽平八郎
定價金拾八錢

不許複製

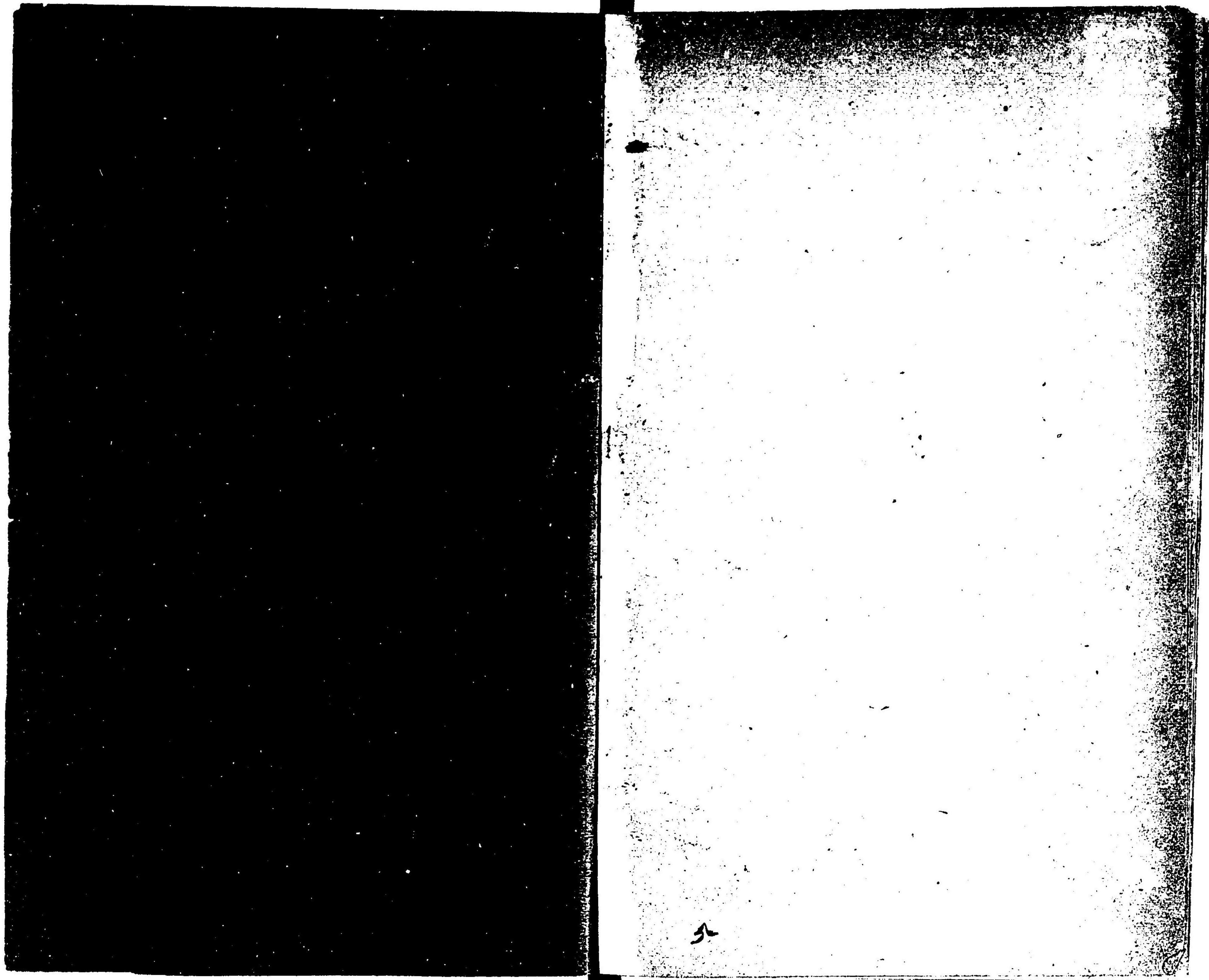
作者 高安月郊

發行者兼印刷者 金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

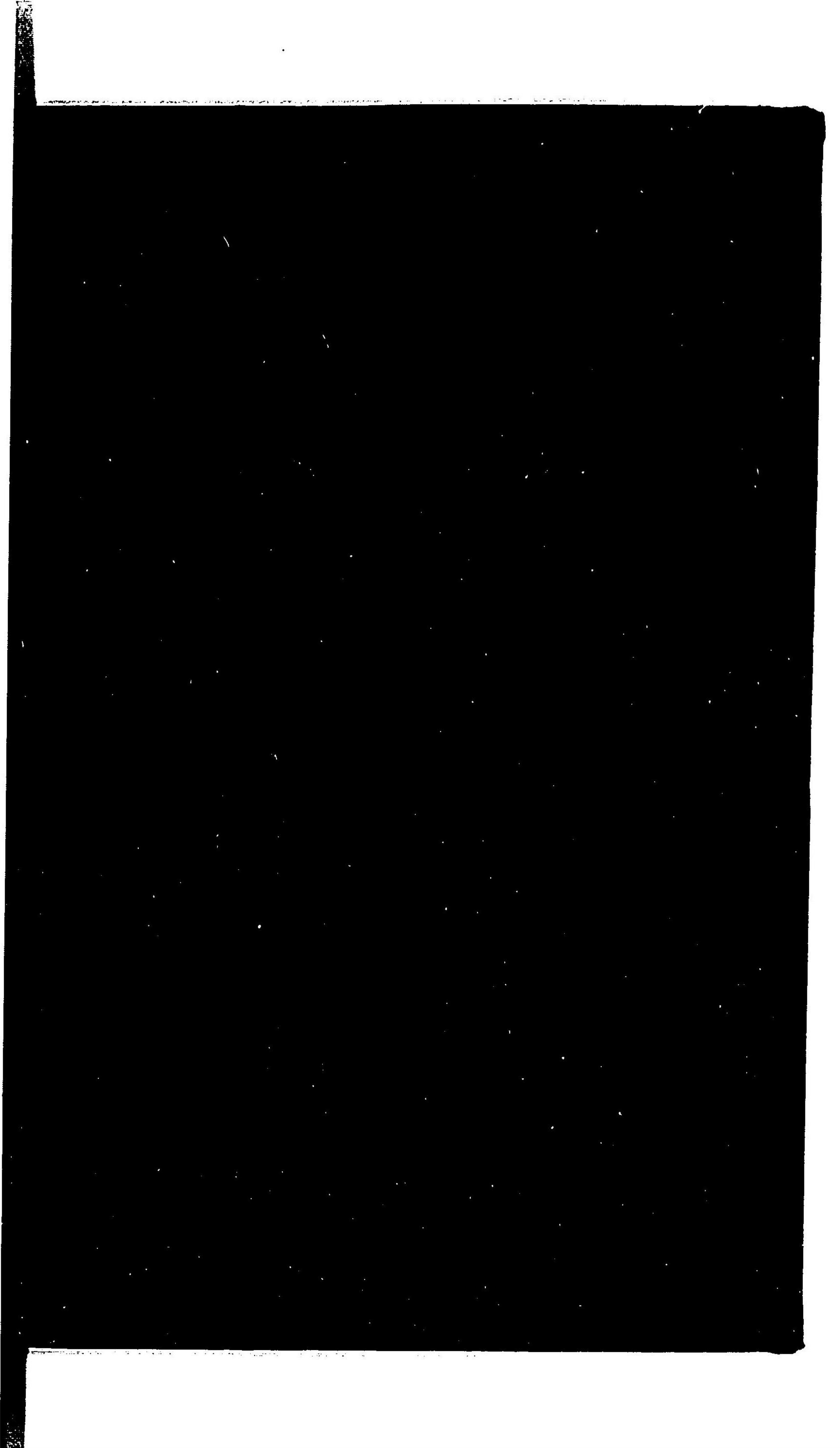
代表者 右社長 原亮一郎
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所 株式會社 秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

賣捌所 各府縣特約販賣所



81
743



088831-000-0

81-743

大塩平八郎

高安 月郊/著

M35

DBK-0014



